



## ○令和4年度 1 学期始業式講話(抜粋)

\*写真は加茂町のしだれ桜です。

### 小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志、～自立した大人となるために～

＜前段略＞桜も満開です。新年度を迎え、みなさんには、気持ちも新たに宮沢賢治の「雨にも負けず、風にも負けず…」の気持ちでがんばって欲しいと思います。この詩には、忍耐だけでなく、人への思いやり、気遣いの意味も込められていると思っています。

コロナ禍では、大きな声を出すことやマスクをはずしての会話は自粛が求められています。このため、相手の言うことが聞こえにくいことはしばしばです。しかし、聴覚障がいがある人に思いをはせてみてください。声が出せない人もいます。インクルーシブ社会、ダイバーシティの意味を考えるとともに、コロナ禍にあっては、思いやりや気遣いがとても大事ではないでしょうか。

そのこともあって、今年度のスタートにあたり、合い言葉を少し変えました。

「小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志 ～自立した大人となるために～」です。

「小さな挑戦」はそのままで。昨年度より、いや昨日より小さな挑戦、小さな変化に取り組んでください。先生方にもお願いしています。本当に小さいこと、些細なことでもかまいませんから、昨年度より、昨日よりここを変えよう、このことに挑戦してみようと取り組んでほしいと思います。学習でも、部活動でも、家庭での生活でも何でもいいです。それを考え、じっくり取り組むことがそれぞれの自立につながると信じています。

変えたのは「小さな善行」です。「小さな気遣い」に変えました。思いは同じですが、行動がすべてではなく、まずは自分の心に少しの余裕を持つこと。その余裕を、相手を思いやる気持ちにもつなげて欲しいという意味を込めました。気遣いを行動に移せばベストですが、必ずしも直接的な行動でなくてもいいのです。例えば、手話を少し覚えてみる。それは聴覚障がいの人に思いをはせた気遣いで、すぐには役に立たないかもしれませんが、思いやりや気遣いの気持ちを育むことにつながり、結果的に自分の成長にもつながります。教室で人に呼ばれて立つとき、椅子を机にしまう余裕を持つ。エレベーターで閉まるボタンを押さない余裕を持つ。それは自分の心に余裕も持つことになるし、見えない誰かの事故防止にもつながります。

心の余裕を持つには、心を整えることが大事です。昔サッカーの長谷部選手の本に題名にもなりましたが、もの事に向かう時には、心が整っていなければ決していい結果は得られないし、何かを吸収しようとする時にも心が整っていなければ入ってきません。部活動の勝負の場面ではよく言われますが、決してそこだけではなく、授業、集会・式典、家庭学習でも一緒です。その意味もあって最初に心を整えてもらう時間を設けました。

最後に「確かな志」、「大きな志」です。私も使うときに言葉が揺れていましたが、「大きな志」で一本化します。札幌農学校のクラーク博士の「少年よ！大志を抱け」の言葉にも込められたように、コロナ禍で先が見えにくい状況だからこそ、見失わない大きな志をもって、自分の限界を少し超えた目標を定めて、努力を積み重ねていく過程を大事にして欲しいと思います。

みなさんの可能性は無限大です。私たち教職員は、みなさんの可能性を高め、広げるための努力を惜しみません。これから1年間「チーム三高／チームカケコー」でがんばりましょう。





## ○令和4年度入学式講話(抜粋・一部改変)

### 小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志、～自立した大人となるために～

歴史と伝統のある学校の生徒として、本日その第一歩を踏み出すわけですが、ここでの三年間で、社会のどこかを支える、なくてはならない自立した大人へと成長していくこととなります。

そこで今日は、「小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志～自立した大人となるために～」という言葉を送り、式辞としたいと思います。これは、昨年度から学校の合い言葉としているものです。

毎日少し成長した自分に出会うのが楽しみになるような小さな挑戦・取り組みを日々繰り返してください。勇気を少し出して小さな挑戦をし、取り組みを続けてください。挑戦に失敗はつきものですが、努力の過程や失敗から学ぶことで人は成長します。三百六十五歩のマーチという歌にも「三步進んで二歩下がる」とあります。小さな一歩の積み重ねが人を成長させます。千里の道も一歩からです。

小さな気遣いという言葉をつけたのは、人を思いやる気持ちを持つことで、心にゆとりができ、自身の生活や取り組みが充実したものとなるからです。その逆もかりです。自己中心的にならず、他者を気遣ってください。気遣いにあふれる学校は、「安心して失敗から学ぶことができる学校」とも言えます。誰かの役に立ちたい気持ちや人を大切にしたい気持ちは人を確実に成長させます。

道ばたのゴミを拾う…なんでもよいのです。それは、誰かが気持ちよく道を歩くための気遣いであり、自分以外の誰かを大切にすることでもあります。マスクの着用や挨拶も同じです。マナーや挨拶は、他者を気遣うふるまいです。

小さな挑戦、小さな気遣いは、自分の限界を少し超えた目標設定とそのための大きな志を持つことから始まります。それが努力の過程を充実したものとし、大きな志だからこそ、結果以上に、努力の過程で自分に手応えを感じます。その過程で失敗や挫折があっても、その都度達成感が生まれ、次への意欲が沸くはずで、未見の我、成長していく自分との出会いが何度もあるはずで。

求める生徒像は、本校「志をもって粘り強く努力し、自らを高めようとする生徒」・分校「何事にも志をもって意欲的かつ誠実に取り組むことのできる生徒」です。みなさんならできると信じています。

最後に、ここにいる新入生が、三年後に自立した大人として卒業していけるよう、保護者や地域と連携しながら教職員一丸となって尽力することをここにお誓い申し上げ、式辞といたします。

「校長室だより第 38 号」は教職員向けのため非掲載とします。



## ○笑顔でノーサイド

県総体が近づいて来ました。三刀屋高校だより『蒼雲』第137号にも書きましたが、県総体では「笑顔」の効用を大事にしてもらいたいと思っています。「笑顔」は、試合において、心を落ち着かせる効果、体をリラックスさせる効果、相手に自分には余裕があるという思いを抱かせる効果、チームメイトに安心感を与える効果等々、本当に多くの効果があると思っています。気遣いは、心に「余裕」がないとできません。「笑顔」は心の「余裕」を生みます。何かに結果を残すためには「余裕」が必要です。ギリギリの状態では自分の持っている力を十分に出すことはできません。「心技体」すべてにしっかりと準備が整い、ある程度の「余裕」があることが結果につながることはありません。そういう意味でも「笑顔」を大事にしてもらいたいと思います。



先月審判の判定に苦笑いを浮かべたプロ野球ロッテの佐々木朗希投手に対する球審の対応を巡る問題が報道で取り沙汰されました。スポーツ競技の多くに審判や係員、補助員の方などがいて、試合が成立しています。この問題を通して、敬意を払うことの大切さをあらためて感じました。

子どもの頃、「ラグビーは得点を挙げても喜びを表現しない。審判にも抗議をしない。それは走り過ぎて疲れているからだ。」と聞いたことがあります。もちろん間違った解釈です。その後TVドラマ「スクールウォーズ」などを観る中で、ノーサイドの精神を知りました。今は、相手に対する敬意からだと思っています。試合が終了すれば、敵と味方、勝者と敗者の区別はなくなり、お互いの健闘をたたえることがノーサイドという言葉に込められています。そして、試合は相手があって成立することを忘れてはなりません。

実際にラグビーの試合を観ると、試合終了後は両チームの選手が握手をしたり、笑顔で話していたりというシーンを見ます。身体コンタクトが激しく、お互い熱くなる場面が多いラグビーだからこそ、お互いの健闘をたたえ合うという精神が尊重されていると理解しています。ラグビーのユニフォームに襟があるのは、そのふるまいや精神を忘れないためと聞いたことがあります。ラグビー発祥の地であるイギリスでは、試合後に両チームが集まって健闘をたたえ合う「アフターマッチファンクション」というお酒を飲みながら試合についてあれこれと語らうパーティーがあり、そこでは正装で出席するのが決まりとなっていたためという説もあります。ラグジャツの上からブレザーを着てネクタイを締められるよう、ドレスジャツと同じように首元までボタンを留められるように作られているということらしいです。チョコちゃん風に言えば、諸説あるということでしょうか。

大リーグの大谷選手の大活躍に勇気をもらっている人も多いと思います。大谷選手も時折喜びの感情を爆発させることがあります。でもよく見ると、三振を取った時などのガッツポーズは相手に背を向けてしています。テニスの錦織選手なども、ガッツポーズは相手に背を向けるか、相手を見ずに自分自身を鼓舞し褒めるかのような感じでしています。相手に威嚇的にするようなことはしていません。

いろんなスポーツで、試合前に礼をしたり、握手をしたりします。ボクシングでも、グローブタッチの握手をしてから試合が始まります。日本発祥の柔道も、試合後は握手しています。いろんなスポーツで相手への敬意を忘れないようふるまいがされています。

今はコロナ禍にあって、握手は自粛の競技がほとんどです。しかし、県総体が様々な人のおかげで成立すること、なによりも競い合う相手があるから勝ち負けが決まることを忘れず、そしてそこで最高のパフォーマンスができるよう、笑顔でノーサイドの精神を忘れず、がんばって欲しいと思います。



## ○猿は文化的か？

「多文化共生」、「多様性」…今私たちが生きている「社会」で大切な考えであることは言うまでもありません。例えば「多様性」という言葉を耳にする時、LGBTQ+や障がいがある人などマイノリティに関することが話題になっていることがあります。それは、これまでも社会に存在していたにもかかわらず、社会からの十分な理解を得られず苦しい思いをしてきた人たちに、社会の目が向けられるようになってきたこととも言えます。



**「一部の人を閉め出す社会は、もろくて弱い社会である。」**と、1979年の国際障害者年行動計画で言っています。多様性には、こうした面と、価値観や宗教、趣味や食文化、言語やコミュニケーション・関係性の取り方など生活様式等に関わる面があります。前者の問題は、教育はもちろん権利保護や法律等も解決に向けた手段の一つとなりますが、後者におけるすれ違いや争い、誤解・偏見等は、人間性の育成や他文化理解など教育に係る比重が大きいと思っています。



人間は、歴史や地域、文化によって異なった社会をつくります。一方、猿はいつでもどこでもほぼ同じです。人間は、複雑なことや現実の出来事を、記号化するなどして共通のものとして認識することができます。例えば炎を見て漢字で「火」と記号化・言語化することができます。だから会話が成り立ち、コミュニケーションが活発化し、お互いの理解も深まります。

極端な例えですが、魚市場などでは専門用語が飛び交い、魚の専門知識のある人が売り買いをします。スーパーなどでは、魚の説明が書かれていることはあっても、店員と客がお互いに専門知識を持って買い物をするのが前提になっていないことが多く、会話は市場ほどありません。コンビニでは、買い回りする際に商品について店員と会話することはほとんどありません。会話が、文化や技術の発達とともに少なくなってきました。私が高校の頃にウォークマンが登場しました。猿がウォークマンを聴くCMが人気でした。今はスマホを高校生ならほとんど持っています。自分だけの音楽・世界に浸れます。昔はTVも家に1台しかなく、子どもも大人の演歌を聴かされました。今は自分の好きな世界に閉じこもることができ、それが他者への理解力やコミュニケーション力の低下につながる可能性があります。

文化には、一段高いところにあるという意味のハイカルチャーと、生活様式等をさすポップカルチャーとの両方の意味があります。前者は「文化人」、後者は「食文化」という例が適当でしょうか。

芸術に例えると、文化は共通の記号で書かれた台本(シナリオ)、社会はそれをもとにした演劇、人間はその演技者とも言えます。社会では、それぞれが思い思いの演技者になることは、台本がある以上制約が発生し、それぞれに社会から役割が与えられることがあります。「○○らしく」という言葉で、あいまないで異質な役割を与えられることもあります。例えば「女らしくなさい」…それは抽象的であり、個々で受け止め方も違ってきます。演歌などで女性は花によく例えられます。それは、動かない、つまり受動的な存在の裏返しとも言えます。大枠のイメージ・役割があるから余計に苦しくなります。そうした社会的・文化的につくられた性の役割を打破するのがジェンダーの考えです。

猿と違って、人間はコミュニケーションができ、文化を持ちます。しかし、多文化共生社会でなく、多様性が認められない社会だと、共通化が行き過ぎ囲い込み的になり、差別や戦争などが起こります。

明治維新时期に隠岐で島民革命(隠岐騒動)がありました。そこから見えるのは、隠岐の人が人情を大事にし、異質なものを受け入れ、共に生きていこうとする精神です。流人を受け入れてきた隠岐。逃げ場のない島だからこそ、対立ではなく、対話を重ね、意見が違っていても認め合い助け合っていくという精神が、隠岐騒動を収束させた要因です。差別や偏見、戦争の抑止力は、このような精神、コミュニケーション力、他者のことを理解する力、気遣いです。小さな気遣いを積み重ねていきましょう。



## ○「～切る」

沢庵という和尚を知っているでしょうか。3年生で日本史を学ぶ生徒は、江戸時代の紫衣事件で聞いたことがあると思います。一休和尚や千利休のお寺として有名な京都にある大徳寺の僧です。大根の漬物の名前としてのタクアンは、多くの人が知っていると思います。諸説ありますが、沢庵和尚が考えたとも、江戸に広めたとも言われています。



この沢庵和尚の書物である『不動智神妙録(ふどうちしんみょうろく)』に、武士に説いた言葉として「前後裁断」が出てきます。「前(過去)と今、今と後(未来)の際(きわ)を切り離して今を生きよ」という意味です。

プロ野球・阪神タイガースの元投手、下柳剛選手がグローブに縫い込んでいた言葉として、阪神ファンの間では有名です。(打たれた)過去をくよくよ引きずっても何も生まれない。(打たれるかもしれない)未来を憂えても消極的になるだけである。(今投げる一球に、)つまりこの時この瞬間だけに集中して生きよ(、全力を尽くせ)・・・という意味です。「過去」を今更変えることはできません。同時に来てもない「未来」を心配しても仕方ありません。私たちができることは、「過去」のことにくよくよせず、「未来」に向けて「現在」を一生懸命に生きることです。

この格言にも関係しますが、「○○切る」の○○にはどんな言葉を思い浮かべられるでしょうか。

「出し切る」、「やり切る」、「思い切る」・・・他にも「振り切る」など・・・野球でポテンヒットとなった時に、解説者が振り切ったからヒットになったと言うのを聞くことがあります。大事なことは、積極的な姿勢、前向きなプレーであったかどうかを言いたいのだと思っています。

私は大学までソフトテニスをしていて、今は趣味で時折硬式テニスの大会に出たりしています。試合で、マッチポイントが自分のレシーブだった時は、いつもすごく心が揺れ動きます。レシーブは、サーブと違って自分のリズムやタイミングでプレーを始めることができません。特に負けている時のマッチポイントはとても葛藤します。負けているから強気に行くべきか、負けているからこそ安全に確実にレシーブを返して慎重に行くべきか・・・。答えはその都度変わりますが、大事なことは弱気な自分を捨て切れているかどうかだと思っています。

スポーツでも受験でも、私たちが後悔するかどうかは、自分の持っているものをすべてつき込んだか、出し切ったかどうかだと思っています。

NHKの「ランスマ」という番組をよく観ます。先日の放送で、86歳のランナーが長野マラソンに挑戦して4時間余でゴールされたのが特集されていました。毎日12～13km、月間で400kmは走り込んでいるそうです。80歳代後半でサブ4、つまり4時間切りが夢だそうです。ちなみに私の目標はサブ5です(笑)。1km6分ペースでもサブ4はできません。夢があるから、高い志があるからがんばれるそうです。年を重ねるごとにできないことや衰えることはあるけど、あきらめるのではなく、毎日毎年が夢への挑戦の積み重ねだそうです。その年齢でできるすべての努力をやり切っているからこそ、4時間余で走り切ることができたのだと思います。努力は走り込みだけではありません。食生活を含めて生活全般に及びます。この番組では女子マラソン60～64歳の世界記録を持つ弓削田(ゆげた)さんがコーチとしてよく登場されます。記録は驚異のサブ3で、61歳の時より62歳の時の方がさらに記録を伸ばされています。コーチをされている時に、「全力を出し切ったかどうか」をよくランナーに問いかけて叱咤激励されています。

その時できる最大限の努力、挑戦をしているかどうか。自分にも問いかけていきたいです。



## ○合格体験記

県総体が終わりました。多くの3年生は受験モードへの切り替え(ステップ)となります。このあと大会やコンクール等がある部活動の人も含め次の最終切り替え(ジャンプ)は学園祭後です。ちなみに最初の切り替え(ホップ)は今年1月の共通テスト後でした。それぞれ飛ぶ間隔や距離は違えども、いい切り替えをしながら夢の実現に向けて頑張りたいと思います。



三刀屋高校の『合格体験記』が発刊されました。そこで切り替えについて触れている卒業生がいました。「吹奏楽コンクールが夏にあり、多くの仲間が受験勉強一色になっている中で焦る気持ちもあったが、思い切って部活動に振り切って頑張った。やり切ったことが、自信やモチベーションにつながり、残り期間を受験勉強一色に振り切って全力投球できたから合格できた。」というような内容でした。

挫折をバネにしたと書いている卒業生もいました。「総合型選抜は不合格だったが、この時受験を通して定めた目標(志)が、高いモチベーションをもたらし、気持ちを切り替えて受験勉強に取り組むことができたことが、国公立大の前期試験での合格につながった」というような内容でした。

入学式等で次のような話をしました。「小さな挑戦、小さな気遣いは、自分の限界を少し超えた目標設定とそのための大きな志を持つことからはじまります。それが努力の過程を充実したものとします。大きな志だからこそ、結果以上に、努力の過程で自分に手応えを感じます。その過程で失敗や挫折があっても、その都度達成感が生まれ、次への意欲が沸くはずです。未見の我、成長していく自分との出会いが何度もあるはずです。…」

これまでの校長室だよりで、富士山登山の「胸突き八丁」について何度か触れました。挑戦をする中で、最後の1～2割は違う質のものが待っているというものです。挫折の多くはこの正念場でおきます。しかし、挫折とするか、意欲に変えるかは自分したいです。挑戦は何度でもできます。

昔担任していた時に、推薦入試への挑戦が受験勉強からの逃げたと感じる生徒に会うことが少なからずありました。そんな中ある生徒が「推薦入試を受けるのは、勉強以外の部活動を含む学校生活、そして学校外でのボランティア活動など自分が高校時代頑張ったすべてのことを活かしたいから」と言っています。今の本校・分校生なら、部活動だけでなく、探究学習や体験学習などから得た成果や学びなども、学校生活で培ってきたものとして活かせるはずです。

私は1年間浪人して大学に入りました。正直に言えば高校時代、受験勉強を本気でしませんでした。不安をやる気に変えられないまま共通一次試験(今の大学入学共通テスト)が終わりました。そんな時に担任が難関私立大の受験を勧めました。偏差値が20近くも離れていたのでもちろん不合格でした。しかし、その大学のキャンパスで受けたことで、また他の受験生と違い、高いお金を出してもらい東京まで受験に来たのに勝負すらできない自分の情けなさを感じました。同時に、来年は絶対に勝負できる学力をつけて大学受験をしたいという気持ちが沸き上がりました。浪人してからの1年間はいわゆる「4当5落(4時間睡眠で勉強するなら合格できるが5時間睡眠なら…)」で頑張りました。朝は5時から起きて記憶もの中心に勉強。その後早くから学校(補習科)に行って勉強。行き帰りの電車では苦手な国語克服を兼ねて読書。テレビはニュース以外見ませんでした。夜は1時頃まで机に向かっていました。平日は1日8時間以上勉強したと思います。人間やる気になればできるものだと思います。気づけば偏差値も落ちた私立大が合格レベルになるところまで伸びていました。唯一の楽しみは、早見優のラジオ英会話の時間。合格して大学に旅立つ前の3月、奇跡の出来事が…出雲に早見優がコンサートに来て、最前列で観られたのです。神様からのごほうびだったと今でも思っています。



## ○「～切る② 切り替え と 区切り」 総体の一コマ (男子バスケット) ⇒

県総体が終わり、多くの3年生は受験モードへ「切り替え」となります。「切り替え」という言葉を使いましたが、気持ちに「区切り」をつけることとは同じでしょうか。やり切った、後悔はないと思える人は、総体を区切りとして切り替えがしやすいかもしれません。しかし、なにをもってやり切ったとするか、思えるかは人によって様々です。



私たちは、日々の生活の中でいろんな区切りをつけながら前に進んでいます。6月6日から本校では家庭学習時間調査がはじまりました。日々の振り返りをする中で、3点固定(起床時間、学習開始時間、就寝時間)の時間を同じにして、生活にリズムをつけることが大事であることに気づかせる。そうしたことも調査目的の一つです。

しかし、無理に区切りをつける必要がないこともあるのではないのでしょうか。総体後の気持ちの区切りもその一つです。区切りをつけることと、そのことを忘れることとは違います。自分の中で無理に、満足できなかった結果や消化しきれない思いにふたをすることが区切りをつけることではありません。

これまでの練習や総体での結果に満足している選手とそうでない選手、レギュラー選手とそうでない選手、団体で出場した選手と出場せずに終わった選手、自分のせいで負けたと思い込んでいる選手や劣勢でも粘れた選手、強気でいけた選手と弱気で守りに入ってしまった選手、初心者ではじめた選手と中学校から続けてきた選手…総体後の思いは一人一人違っているはずで。

昔部活動の顧問をしていた時に、優勝候補と言われながら、団体戦の初戦で思わぬ相手に負けたことがありました。全国総体に行くことを目標に厳しい練習を乗り越えてきただけに、選手の落胆ぶりは言葉にできないものでした。あとで保護者に聞いた話ですが、帰宅後もう一度会場につれていって欲しいとキャプテンをしていた子どもに言われ、日が暮れるまで会場を見つめたまま涙を流し、声をかけることもできなかったことがあったそうです。もう一度会場に行くことで、自分の気持ちに折り合いをつけようとしたのだと思います。この敗戦は、準決勝や決勝だけを想定して練習してきた顧問の責任だと今でも思っていますが、生徒にとっては誰の責任かが大事でなく、がんばってきた結果とその過程、その両方が自分の目標としてきたレベルに到達できたかどうかの方が大事であり、過程が満足であっても結果が不満足なら、なかなか気持ちに折り合いをつけにくいと思います。結果は変えられないし、過程も変えることはできません。でも、これからのことを変えていくことはできます。

総体や部活動に残した思いがあるのなら、無理に思いにふたをして、区切りをつけたことにして前に進もうとすると、逆に前に進むにくくなることがあります。思いは、時間と共に、思い出に変わったり、より強い思いになってそれが意欲に変わったりもします。大事なことは「区切り」をつけることでなく、目の前にある次にすべきことに、きちんと取りくんでいけるように「切り替え」られるかどうかです。

私は、高校からソフトテニスをはじめ、最後の総体では団体戦の初戦でシード校に思わぬ勝利をしました。はずかしながら、公式戦で勝利したのは個人戦も含め団体戦でのその時の1勝のみです。練習もいい加減で、キャプテンでありながら楽しければいいくらいの感じでした。なので、大会前に勝ち負けを語れるレベルではありませんでした。でもその1勝で人生が変わりました。もっと練習をすればもっと勝てたのではないか。練習がいい加減だったのは、負けた時の口実が欲しかったからではないか。つまり、一生懸命やって報われないことがあることに最初から逃げたり避けたりしていたということです。そのことに気づいたのは大学受験に失敗した時です。受験勉強がいい加減だったのは、一生懸命やって失敗することを避けたからだと思っています。つまり部活動も勉強も最初から言い訳や逃げ道を用意していた気がします。

挑戦しなければ、失敗もしない。でも成長もしないし、志が低ければ努力もしない。つらい気持ちや悲しい気持ちに、無理に区切りをつける必要はないと思っています。いつか腑に落ち、自分の気持ちに折り合いが付き、そのことが意欲につながる時がきっとあります。大事なことは目の前のことに志を高く持って取り組むことです。





## ○「手書き」

「山」という漢字の書き順はわかりますか？…私は、小学生の頃から漢字が苦手で、書き順にもまったく関心がありませんでした。

そのせいか文字を書くことがとても嫌いでした。教員になって黒板に文字を書くようになってからは、嫌いではすまされなくなりました。そこで意識するようになったのが書き順です。ある時生徒から書き順が違いますと指摘を受けたことがきっかけでした。日本史の教員なので、1学期の最初に授業で飛鳥時代をやります。「飛」という漢字がうまく書けず変な形の字になった時のことだったと記憶しています。

本屋に行き、小学生用の書き順が書いてある辞書を買って、それ以来うまく書けない漢字がある時は書き順を確認するようになりました。「飛」の書き順を意識して書いたら、自分なりに納得のいく形の良い字になった時のうれしさを今でも覚えています。

これまで自分の名前の一文字である「山」は、おそらく何万回というレベルで書いてきました。辞書で調べたら書き順は正確でした。自分の名前くらいはきれいな文字で書きたいという気持ちからか、自然と正しい書き順になっていたのかもしれない。「山」という漢字は、山の美しい姿、つまり主峰となる山があってその左右に山容が連なるという形の姿をあらわした文字だと言われています。富士山や大山も美しい山ですが、山脈的なイメージが山の語源となっています。そもそも漢字のルーツが中国にあるためでしょうか。

日本の古代信仰では、山には神が宿るとされてきました。奈良県の三輪山は、大神神社の神体山となっており、出雲大社のような本殿がありません。西洋では悪魔の住む山は征服するものとされ登山が発達。日本では修行する場とされ修験道が生まれました。日本の寺には寺号と山号があります。修験道場で有名だった三刀屋の峯寺は寺号、山号は中嶺山です。

今年度の1年生から一人一台端末となり、学校教育のICT化も進んでいきます。パソコンやスマホも普及し、文字(漢字)を手書きする機会はめっきり減りました。校長室だよりもパソコンで作成しています。

最初に教頭になった時にご一緒させてもらった校長先生は、手書きの文字で校長室だよりを発行しておられました。今でもお手紙をいただくときは必ず手書きの文字です。万年筆を使われるのですが、校長室だよりの中でそのことについて触れておられました。

「思いを込めて文章を書く時は万年筆を使います。紙との摩擦が大きく、ゆっくりと字を書くことができます。頭の中で生み出した言葉が、時間をかけて点や画(漢字を構成している一つ一つの点や線のこと)になり、やがて一つの文字になっていきます。ゆっくり、ゆったり筆触が味わえる万年筆が好きです…思いを手で書いて伝えることの意味を考えています…」

そう言えば私も、就職、進学のための調査書や推薦書は万年筆で清書していました。

メールで打鍵された文字を見ることには違和感はありません。しかし、手紙では打鍵された文字で読むのと手書きの文字を読むのでは思いの伝わり方が違って来る気がします。

キーボードで打鍵し、「Y・A・M・A」と打ち込み変換キーを押すと一瞬のうちに変換された「山」という文字が現れます。「打ち言葉」には、書き順や文字になっていく過程がありません。

山を眺めるときに、時折「山」という漢字を無意識に頭の中で浮かべています。同じ山を見ている、その時の精神状態によって、丸文字になったり、角張った字になったり、崩し字になったりもします。でも、その文字には三次元的(空間的)広がりや時間的広がりがあります。

私たちは、「書き言葉」と「話し言葉」の世界で生きています。主体的・対話的で深い学びが学習指導要領の肝となっています。ともすれば、対話的という言葉から、それが「話し言葉」によって成立し、それをICT活用による「打ち言葉」で効率的に深めていくかのようにも聞こえます。

「打ち言葉」の普及による便利さと引き換えに、「書き言葉」が持っている広がりや書き手の個性や思いが失われていくことがないようにしないといけないと思っています。





## ○「進路ガイダンス」

県総体女子バスケットの様子⇒

6月7日(火)に三刀屋高校3年生保護者対象の進路ガイダンスを開催しました。分校は、PTA総会の折りに企画していましたが中止となりました。本校も昨年度はガイダンスを中止しています。

冒頭挨拶では、次のようなお話を私からさせていただきました。

「特別支援教育は、障がいのある生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、一人一人の教育的にニーズを把握し、その持てる力を高め…とされています。これを進路指導になぞらえると「就職・進学のための受験を通して自立した大人となるよう、自己実現に向けた主体的な取り組みを支援するという視点に立ち、一人一人の進路希望を把握し、その持てる力(学力・社会力・人間力)を高めるため、適切な指導及び必要な支援を最大限おこなっていく」となるでしょうか。先日お子様に配布した『進路の手引き』でも、進路指導とは、「在り方、生き方に関する指導」と三刀屋高校は考えています…としています。そのためにも保護者との連携が重要と考えています…」



3年学年主任から総体後の3年生の様子などが伝えられたあと、就職担当教員からは、「新卒者だけが持つプラチナチケット」をキーワードに、就職への心構えなどに関する話がありました。

「会社は、新卒枠を設けて採用しているケースが多い。高校や大学などを卒業する新卒者を対象に求人を出してくるということ。新卒者に対する求人は多いが、転職の場合は同じ状況とはならない。(高校3年生の有効求人倍率が約2.4倍[高校生1人に対して2.4社の求人]に対し、一般の有効求人倍率は約1.2倍)高卒で入社すれば40年以上勤めることになるが、残念ながら早期に離職するケースが少なからずある。離職すれば新卒での就職というプラチナチケットはない状況での就職活動となる。自分なりの就職することや社会人になることへの覚悟や心構えがあるかどうか、就職希望者にはしっかり考えて欲しいと思っている。求人票は7月1日から解禁となり、採用する生徒の学校を指定して求人を出す会社などは、7月中に応募前見学を課している場合がある。8月上旬には応募する会社が決まり、中旬からは応募書類の作成がはじまる。9月16日からは就職試験がはじまる。あと3か月後と時間はさほど残されていない…。新卒者だけが持つプラチナチケットを、高卒段階で使うのか、上級学校進学後に使うのか今一度しっかり考えてもらいたい…。ちなみに、公務員試験などは、新卒枠を設けているケースがほぼないが、それだけ関門が狭くなる。」

私は、大学4年生の時、最初は企業入社を考え就職活動をしていました。プラチナチケットをここで使うつもりでした。総合商社に入り海外で働くのを夢見ていたのですが、文学部で経済のことには疎く、英語ができるわけでもなく、なにか理想があるわけでもなく、ただ商社マンはカッコいいくらいの気持ちでした。当然面接でそのあたりを見透かされ、なかなか内定をもらえませんでした。やっと決まった商社も、学歴重視が見え隠れするので、努力が評価されないことへの不安から内定を辞退し、教職の道を選びました。結局プラチナチケットは使いましたが無駄にしました。そして教員採用試験にも失敗。社会人になることへの心構えと覚悟のなさに気づくとともに、就職先がないまま卒業を迎えることで絶望感を覚えました。就職先の選択をファッションの一つくらいの感覚で選んでいた自分を深く反省しました。

進学についての話では、大学入学共通テストなどの入試制度や学費や受験に係る経費の話、行きたい学校をきちんと調べることの大切さなどが話されました。学費などは、「三刀屋高校進路だより」などでも詳しくお伝えしています。

最後に「進路を考える」として、進路(学校)選択の際に、なにを優先順位として高く持つかという話がありました。なにを学びたいかで選ぶのか。つきたい職業を意識して、どの学部・学科がよいか、どんな資格をとりたくて選ぶのか。どの地域に行きたいか、例えば東京に行きたい気持ちを最優先させるのか。学費の面から奨学金制度の充実度や自宅通学できるかどうかで選ぶのか。今の学力でいけるところにするのか、これからがんばって学力を高めても行きたいところにするか…いずれにせよ、自己実現に向けた主体的な取り組みにつながる進路選択をしてもらいたいと思います。



## ○「ありがとうディスタンス」

隠岐の島ウルトラマラソン 2022 ⇒

「ありがとうディスタンス」を今年のスローガンに、隠岐の島ウルトラマラソンが2回の中止・延期を経て3年ぶりに開催されました。今回で15回目の開催。私にとってはボランティア1回を含め連続6回目の大会でした。隠岐に縁があるマラソンランナーの川内優輝さんも毎回出場されています。コースのほとんどが標高差 100m~200m の山々が連続するコースで、近年は高温・多湿にも悩まされながらの過酷なレースです。川内選手もあいさつで、「この大会でゴール直前に倒れて救急車で運ばれたことがあります。絶対に無理はしないでください。」と注意喚起していました。私も後半は軽い熱中症のような症状となりました。かなりペースダウンしたものの、なんとか50キロの部5回目の完走を果たしました。



しんどくて走れなくても、走ってしまうのが隠岐の島ウルトラマラソンの良さでもあります。数キロごとにある給水・給食所(エイド)を、中高生をはじめとしたたくさんのボランティアの方が運営し、選手が近づくとゼッケンから名前を確認して、遠くから「〇〇さん、ナイスラン。おつかれさま。」などと声援を送りながら、給水所では一生懸命おもてなしをしてくれます。沿道では子どもからお年寄りまでたくさんの人が応援してくれます。各家庭に配られる選手一覧と旗を片手に、ランナーの名前を呼びながら声援を送る人。看板や横断幕をつくって応援する人。太鼓を叩いたり、踊ったり、音楽を流したり奏でたりして応援する人・・・なかでも隠岐の島ウルトラマラソンは私設のエイドが多いのが特徴です。ランナーを上げまし、もてなそうと思ひ思ひのものを用意してランナーを待っていてくれます。飲料水、飴、パン、おにぎり、果物、チョコ、ゼリーなどをはじめ、絞った果物ジュースやケーキ、たこ焼き、焼き鳥もこれまでにありました。ラスト10キロの岬コースは、夕方で海風も吹くことから肌寒く感じることもあります。そのため暖かいコーヒーをふるまうエイドが出てきます。疲れた身体を気遣った甘い卵焼きに暖かい味噌汁をふるまってもらったこともあります。エアーサロンパスもあちらこちらで差し出されます。

ラスト10キロほどになると、声援が「頑張れ」から「おかえりなさい」に変わってきます。長く続く山道の連続を走りながら隠岐の島を一周し、ゴール会場近くまでよう頑張って帰ってきたねという意味です。

今回は、感染症対策で、声を出しての応援やランナーに近づきハイタッチする行為などは禁止とされ、ランナーもエイドではセルフサービスとなっていました。もちろん私設エイドは禁止。しかし、隠岐の人はそれを守りながらも、できる最大限の工夫や配慮をして応援をしてくれました。そういう意味では応援などは例年よりさみしさを感じることもありましたが、これまでの大会より温かい気持ちがより伝わってきました。物理的なディスタンス(距離)は感染症対策からも大事ですが、心の距離は感じませんでした。

毎回ランナーには島の小学生から手書きの激励メッセージが届きます。加えて今回は完走者に手作りメダルがありました。私のメダル裏面はろうそく岩の絵。もちろん一人一人絵は違います。

ある新聞でも、100キロの部で2位に入った雲南市の方の「拍手が力になり、歩こうと思って歩けなかった」という沿道の応援に感謝するコメントが紹介されていました。

ボランティアの方々がランナーの走りやすいように草木を伐採され気持ちの良い道路脇を、沿道の応援やふるまいをはじめ隠岐の人のやさしさや温かさに触れながら、また隠岐の景色の素晴らしさを堪能しながら走ります。山越えばかりでかなり過酷ですが、最後はもう少し走っていたい気持ちになっていきます。ゴール付近では、中学校や高校の吹奏楽部が祝福演奏してくれます。残念ながら試験期間中の時期で例年17時過ぎまでなので、私は1回も聴いたことがありませんが・・・こうした中で、感動が島を一周し、ゴール会場で気遣いに対する感謝の気持ちとともに心が一つになっていきます。

最後 2 キロの町中に入った時、久しぶりの大会ということもあって交通整理にとまどい大渋滞が起きていました。しかし、誰一人いらだつようなこともなく、私も走りながら警官に「暑い中大変ですね。お疲れ様です。がんばってください！」と声をかけたら「ありがとうございます。がんばります。」と返してくれました。言葉かけが逆かなと思ひながら心がほっこりしました。途中足が痙攣しうずくまっているランナーを少し介抱しました。あなたが遅れては申し訳ないから先に行ってくれと言われ走り出したのですが、途中で「ありがとうございました。元気になりました！」って追い抜かれました。そんな光景があちらこちらで見られます。励まし合い、支え合い、助け合いの中で大会が盛り上がっていきます。

私は2回隠岐に赴任しました。教え子や元同僚、友人や知り合いなどと数秒間の再開を果たしながら走りました。「先生おかえり！来年も待っているよ！」というメッセージに胸が熱くなる一日でした。



## ○「7月7日」

盧溝橋⇒

旧暦では、7月15日の夜には祖先の霊が戻ってくるとされ、その際に着せる衣服を機織(はたおり)して棚に置いておく習慣があったそうです。棚に機で織った衣服を備えることから「棚機(たなばた)」という言葉が生まれたとも言われています。



その後7月15日が仏教上の行事「盂蘭盆(うらぼん)」となり、棚機(たなばた)は盆の準備をする日とされ、1週前の7月7日に棚機は繰り上げられました。これに中国の伝説が結びつけられ、天の川を隔てた織姫(おりひめ)と彦星(ひこぼし)が年に一度の再会を許される日とされるようになり、7月7日が七夕と言われるようになったそうです。

天の川から川が連想されることから、7月7日が「川の日」となったり、二十四節気の「小暑」つまり夏らしい暑さがはじまる頃でもあることから、「冷やし中華の日」にもなったりしています。

明るいイメージの多い7月7日ですが、この日が盧溝橋事件の日であることを認識している日本人はそこまで多くないと思います。

盧溝橋事件とは、日中戦争の発端となった事件で、1937年(昭和12年)の7月7日、北京郊外の盧溝橋で起きた日本軍と中国軍との衝突事件です。夜、日本軍が盧溝橋近辺の河原で演習していたところに銃撃があり、兵士が1名行方不明となりました。その後発見されましたが、散発的に銃撃があったことから、翌朝日本軍が中国軍を攻撃したことが、日中戦争のはじまりとなりました。銃撃が中国軍によるものかどうかは不明です。

1945年8月6日広島市に、同月9日長崎市にアメリカ軍が原子爆弾を投下しました。犠牲になった人々を慰霊するため毎年8月には平和記念(祈念)式典があります。また、8月15日は太平洋戦争の終戦の日であり、毎年全国戦没者追悼式も行われています。

一方、中国では、国恥(記念)日というものがあります。数年前に、国恥日はいずれも日本に関係しているとする記事を中国のメディアが取り上げたことがあります。

1つめは5月9日。1915年(大正4年)に日本が中華民国の袁世凱に対し屈辱的な21か条要求を突きつけ、その要求を受け入れさせた日です。2つめは9月18日。1931年(昭和6年)に柳条湖事件がおきた日です。これに端を発し満州事変がはじまりました。当時日本の首相は、島根県出身の若槻礼次郎でした。3つめが、7月7日の盧溝橋事件の日で、4つめが12月13日です。日中戦争により1937年首都南京が陥落した日です。翌日から日本軍による中国人の虐殺、いわゆる南京大虐殺がおきたとされています。

盧溝橋は、この地を訪れたマルコポーロが、著書『東方見聞録』で「世界中のどこを探しても、匹敵するものはないほどのみごとな橋」と記録したことから、「マルコポーロブリッジ」の別称もある橋です。約15年前にこの地を訪れましたが、今でもマルコポーロの言葉を彷彿させる橋でした。それより前の2001年10月に小泉純一郎首相がこの地を訪れ、現職の首相として初めて中国の国民の前で頭を下げるという歴史的な出来事がありました。この約1か月前の9月11日にアメリカで同時多発テロがおき、多くの人々が犠牲になった直後でした。

2016年5月、オバマ大統領が広島に訪問し、広島記念公園で献花したことは記憶に新しいところです。ちなみに、12月8日は太平洋戦争の開戦記念日ですが、アメリカにとっては真珠湾攻撃を受けた日、「リメンバー・パールハーバー」として戦争の合い言葉にもなりました。

被害者はそのことをずっと忘れません。逆に加害者側はその出来事を同じようには覚えていないことが多いことは否めません。いじめもそうです。三高生、掛高生には、相手を傷つける人でなく、相手を気遣うことができる人になって欲しいと強く思っています。



## ○「1学期終業式講話」

隠岐養護学校公式Instagramより転載 →

この1学期、みなさんの高校生活の大切な教育活動が、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を少なからず受けました。こうした状況がもう2年半も続いています。過酷な状況の中にあっても、自分を律して、大変落ち着いて学習や部活動に取り組んでくれたことに感謝しています。

学校というのは、決まった時期に学校行事や式典、また部活動の大会や発表会などが行われることで、時の移り変わりを感じ、社会生活がきちんと送れていることを認識する場であり、また自分が社会の一員であるということを実感する場でもあります。

また、高校時代は、自立した大人となるために、家族や親戚以外の、同年代との付き合いや地域を含めた大人との関わりを通して社会性を身につけていきます。学校は、みなさんにとって大切な場所であるということ、今一度しっかりと感じるとともに、その場をみんなで守って欲しいと思います。端的に言えば感染症対策をしっかりとやっていくということです。

人は、とかく見えない不安や恐怖にとらわれたとき、同じ人間をおやみに脅威に感じたり、攻撃の対象と考えたりすることがあります。いらだちを人にぶつけてしまうこともあります。でもそういう時だからこそ助け合うことができるのも人間です。「人間性」を良い形で発揮できるかどうかは自分次第です。ぜひ気遣いの細やかな素敵な高校生になってください。

校長室だよりでも書きましたが、6月に3年ぶりに開催された隠岐の島ウルトラマラソンに参加しました。今回ボランティアを含め6回目の参加でしたが、私がウルトラマラソンに参加したのは、当時勤務していた隠岐養護学校で働く先生たちが、素敵な大人の姿を生徒に見せることが特別支援教育のひとつだと考え、いろんなことに挑戦する姿、何事にも真摯に取り組む姿、こまやかな気遣いをする姿を生徒に見せておられたことに感銘を受けたからです。

当時私は教頭だったのですが、特別支援学校にこれまで勤務したことがなかった自分に、そして授業をするわけでもない自分に何ができるのかと考えた結果の一つとして、ウルトラマラソンへの挑戦、苦手なマラソン克服に向けて練習をしっかりと積むことへの挑戦を決めました。

2年前に大会が中止になってから、自分で決めた大会が再開されるまでの練習ノルマが、年明けからの感染拡大などの影響もあり5月中旬時点で達成がほぼ難しい状況になっていました。練習ノルマは休日中心に年間1200kmとしていました。ほぼあきらめ、自分への言い訳を考える日々が続きました。しかし、5月下旬から思い直し、平日早朝練習をするようにし、なんとか大会直前でノルマを達成できました。あきらめず挑戦しようと思い直したのは、県総体で見た生徒のみなさんの熱いプレー、あきらめない姿勢、やり切ろうと挑戦する姿、はげまし助け合う姿を見たからです。自分をはずかしく感じ、思い直しました。自分に課したノルマを達成できてなかったら、完走率の低かった今大会では完走できなかったかもしれません。

3年生の皆さんは、受験・進路決定に向けた「本気の夏」を迎えています。努力を重ねる素敵な3年生の姿を1・2年生に見せてください。2年生は、部活動や学校行事などの中心的な役割を担っていきます。素敵な姿を1年生に見せてください。1年生は高校生になり自立していく姿を地域の方や中学生に見せてください。そして全学年その素敵な姿を保護者に見せてください。きっと応援団が増え、仲間も増え、自分の力となって返ってくるはずです。リーダーとは人に良い影響を与える人です。みんながリーダーとなる学校であって欲しいと思います。

みなさんにとって、この夏休みが有意義な日々になることを願って、終業式の話とします。

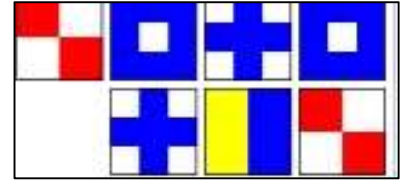


※写真は、隠岐養護学校の先生です。今大会、隠岐養護学校ののぼり旗を背負って50キロを完走されました。在校生はもちろん、卒業生や保護者も勇気もらったと思います。地域の方やランナーの方たちは、きっと学校の応援団になってくれたと思います。部活動なども同じだと思います。その活躍や取り組みは、きっといろんな人に勇気と感動を与え、学校やそれぞれの応援団を増やすことにつながっています。



## ○「英雄ネルソン」 船から船への送る信号旗で「DUTY」と読む ⇒

これまで校長講話は何回聴いたことでしょうか。私は、教員になってからも含めるとおそらく300回以上だと思います。一番印象に残っているのが「ホレーショ・ネルソン」に関する講話です。彼は、トラファルガーの海戦で勝利した、ナポレオンからイギリス



を守った海軍提督です。彼が、信号旗を使ってイギリス艦隊の水兵に送った言葉が、「英国は**各員がその義務を尽くすことを期待する**」(England expects that every man will do his duty)で、イギリスの故ダイアナ元王妃の地雷撤去運動にも影響を与えたとされる「ノブレス・オブリージュ」の考えにもつながっているとされます。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を破った東郷平八郎もこの言葉に影響を受けたとされ、「**各員一層奮励努力せよ**」と信号旗(Z旗)で激励しました。

「高校生として努力せよ」という講話がされたわけではありません。校長先生は世界史の先生で、彼の生い立ちから、功績、歴史的背景などを長々と話されました。「この講話から校長先生が言いたいメッセージはなんだろう」と、長い講話の中で自分なりに思考を繰り返しました。おそらく20分近くたった最後に言われた言葉が、「言いたいのは、受験生は寝ると損(ネルソン)だということです。」でした。メッセージとネルソンの功績等とはほぼ関係ありませんでした。

なぜこの講話が印象に残ったのか。落胆と疲れが一気にやってきたからだと言えませんが、一番は長時間講話が続く中で、自分なりにこの講話に込められたメッセージを思考し、話の中から探ろうとしていたからだと思います。また、思考の方向性と最後の言葉とに大きな差があったからだと思います。話は違いますが、高校の時数学が苦手でした。そんな中高校2年の時に教えてもらった先生の授業がとてもわかりやすく、定期試験でも高得点がとれました。しかし、模擬試験での成績は一向に伸びませんでした。

学習には、「知る」→「わかる」→「深める」の過程があると思っています。先生の授業はわかりやすいというのは一見良さそうですが、「知る」から「わかる」過程で思考が深まっていないと、つまり教師がわかるまでを丁寧に導きすぎると学力向上にはつながりにくいと思っています。また、「知る」から「わかる」過程を公式化して自分の中で「わかる」状態にした場合、公式にあてはめることで思考を最小限にとどめているため、わかった時の感動も少なく、そこから新たな疑問や問いも沸いてきません。「知る」から「わかる」過程で、どれだけジレンマ(葛藤)を味わい、思考をしたかが大事です。そうでないと学びが暗記的になってしまいます。「わかる」から「深める」過程、探究にジャンプするには、「わかる」過程での思考の量と質が大事です。

探究や、思考・判断・表現というような言葉が、今の教育のキーワードになっています。学びには感性が大事だと考えています。感性は、探究や思考を繰り返すことで磨かれていきます。「なぜだろう」という疑問から、調べたり、深めたり、考えたりしていくことで学力が身につけていきます。あたりまえのことをあたりまえと思わず、感性をさらに磨き、主体性を養ってください。

「あたりまえ」の反対は、「有り難い」です。あたりまえでないことに気づけば、感謝の気持ちにつながります。人生や学びを豊かにしていくには、いかに「あたりまえ」のことが、「あたりまえでない」ことに気づけるかだと思っています。2学期が有意義なものになることを期待しています。

\*「ノブレス・オブリージュ」とは、財産、権力、社会的地位の保持には義務が伴うという考え。



## ○「謙虚」

秋桜（コスモス）の花言葉は、謙虚、調和 ⇒

「感動、感謝、気遣い」、「健康管理、換気、気遣い」など、Kの頭文字で始まる3つの言葉を使って、これまで講話や校長室だよりなどで話をしたことがあります。



以前顧問をしていた高校のソフトテニス部の部旗には、「感動、感謝、謙虚」とありました。勝っても負けた相手に「敬意」を払い、負けても言い訳したりせず「謙虚」でいることが大切だという意味と理解していました。

三刀屋高校の校歌には、「われらの三高ここにあり。ひとしくともに誇るべし。」とあります。自慢は、単に相手に対して行う行為。誇ることは、他人から見て価値があることを、自分自身も讃えながら「謙虚」な姿勢で示すことだと思っています。

最近、「**謙虚さは慎重さにも通じる**」と感じることがあります。うっかりミスが増えたからです。ミスをするのは、単なる集中力の欠如に加え、特性や障がい、病気や加齢などが原因の場合もあります。しかし、私の場合ふと自分自身を見返すと、あたりまえのことをあたりまえと思い感謝の心を持っていなかったり、少し高飛車だったり…謙虚さが薄れ慢心している自分に気づくことがあります。

人は生活をして行く上で、人、物、環境などにおいて、良いことも悪いこともあります。全てのことをあるがままに受け入れることは難しいものです。ですが、これを受け入れていくことが、「感謝」すること、「謙虚」な気持ちでいることにつながると思っています。誰かにぶつけたり、言い訳を考えたりすることでないと考えます。

個人データの流失などの人為ミスが報道等で見聞きすることがあります。もしかしたら、個人や組織の「謙虚さ」が薄れていたから起きるミスかもしれません。

3Kではないですが、人は、「かきくけこ」を意識すると豊かな人生を送れると言う人がいます。「か＝感動・感謝、き＝気遣い、く＝工夫、け＝謙虚、こ＝克己、向上心」です。

始業式の講話で話をした「感性」が、こうしたことの土台にあると思っています。謙虚さがなくなるのは、いろんなことがうまくいっていたり、満たされた生活をしていたり、年を重ねて物事になれたり年下が多くなったりするうちに、それがあたりまえになり慢心してしまうことから始まると考えます。楽な道や近道ばかりを追い求めると、「有り難さ(ありがたさ)」を忘れ「感謝」の気持ちが薄らいでいきます。そして「感性」が衰えていくと、美しいものを美しい、醜いものを醜いと感じられなくなります。人を傷つけても感じなくなり気遣いもしなくなります。物事を追求したりもしなくなります。向上心に乏しい自分の価値観がなによりも優先するようになり、その価値観を人に押しつけるようになりたりもします。そうなってくると、危険が身に迫っていても、それを察知する力が失われていき、人も離れ、結果的に自分が不幸になっていきます。

隠岐の島ウルトラマラソンを走る時は、必ず背中に「克己」と書かれたTシャツを着て走ることにしています。己に克つ。自分自身に勝つ。それは、人に勝つことよりも大事なことは、傲慢にならず慢心せず謙虚でいることの裏返しと思っています。



## ○「お疲れ様」

分校体育祭の様子 →

本校の学園祭が終わった時に、「お疲れ様」という言葉をあちらこちらで耳にしました。分校の体育祭は、1学期の終業式前でしたが、この時も「お疲れ様」という言葉をあちらこちらで耳にしました。



「お疲れ様」という言葉を私たちは日常よく使います。校内教職員間の公用メール文頭には、定型句的に「お疲れ様です」というのをよく使います。教頭時代に、校長先生あてメール文頭に、この「お疲れ様です。」という言葉を使っていいのか迷ったことがあります。少なくとも「ご苦労様」ではないなどは思いつつも、文頭にはどういう言葉が適切か悩んだことを覚えています。

ある新聞で、50代の編集委員のコラムに次のようなことが書かれていました。

「20代前半の記者(部下)に『今朝からがんばっておられましたか、なにかめ切が近いですか。』とエレベータで声をかけられた。なにか違和感を覚えた…。』というものです。一見なにげない、問題のない普通の会話のようにもみえます。丁寧語も使っています。でもしっくりこない…。という筆者の感想に共感しつつも、その理由がはっきり浮かんで来ませんでした。おそらくは「がんばる」という言葉だという筆者の感想から少し考えてみました。

例えば、社員が社長に「今日はがんばっていますね」というのは適切でしょうか。社長が社員に使う言葉としては違和感はありませんが、社長と社員の関係性から考えると、その逆は少し違和感があります。がんばっているのを評価するのは社長の方でないかと思うからです。この会話では、社員が社長を評価する感じにはなっていないでしょうか。編集委員と若い記者の会話も同じだと考えます。今の時代、相互評価も必要かもしれません。また、そのような微妙なニュアンスまで考えていたらコミュニケーションが活発化しないと思う人もいるかもしれません。しかし、昭和生まれの私にはやはり違和感が残るのは否めません。

「ご苦労」という言葉を、昔時代劇でよく耳にした覚えがあります。だいたい、殿様的な人が、家臣に言う言葉だったと思います。「苦労をかけましたね」という意味合いのある言葉で、頼んだ側、命令した側の言葉ということでしょうか。教頭時代のある時、校長先生が「先に帰るね」と声をかけられた時、「ご苦労様でした」と言いかけて、「お疲れ様でした」と言い直したことを覚えています。しかし、宅配便の方に荷物を届けていただいた時に、まれに「ご苦労様でした」と言うことがあります。日本語はむずかしいなと思います。

山陰中央新報のこだま欄に2回にわたって分校生徒のコラムが掲載されました。コミュニケーションの重要性の話、友人の言葉で救われた話がありました。広辞苑をひもとけば、言葉にはいろんな意味があることがわかります。すべて覚えて使い分けることはまず無理です。差別的な用語も一緒に、すべて覚えて使わないようにすることには無理があります。相手を思い気遣って言葉を選ぶことを心がけるとともに、その場にあった言葉かどうかの判断ができる感性を磨きながら、コミュニケーションを通じてお互いに元気や勇気がもらえるようにしたいものです。



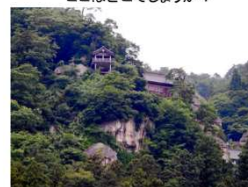


## ○「掛合中学生さんの学校訪問」

⇒講話スライドの一部

9月14日に掛合中学生さんが三刀屋高校を訪問してくれました。校長室だよりを読んだのでいろいろ話を聞きたいというものでした。関心を寄せてもらったことに感謝感謝です。講話の中で使ったスライドの一部が、山形県の山寺の風景です。

ここはどこでしょうか？



この風景から「閑さや 岩に沁み入る 蝉の声」という句がつかれる感性のすごさの話をしました。先日聞いた講演の「これからの社会で必要な武器の一つが感性だと思っています。」という話の紹介で、このスライドを使用しました。

講話は、掛合中学生さんから事前にいただいた 11 個の質問について答える形で進めました。とても真剣に約 40 分間講話を聞いてくれるので、申し訳ないと思いつつも5分も延長してしまいました。

質問の一つに「貴校として地方創生、島根(雲南)の形成者育成の視点での取り組みを教えてください。」というのがありました。

講話では「地域に関わる学習を通して、あたりまえのことがあたりまえでないことに気づき、島根や雲南に、そして働くことに誇りをもつようになっていくと考えます。まずは気づける感性を磨くことが大事。だから授業や探究学習を大切にしたい。また、こうした学習を深めていくことは、地域貢献にもつながっていくので、JRC部を中心にボランティア活動に参加する生徒が増えつつあります。地域の方々にその活動や活躍を応援してもらったり、認めてもらったりする中で、自信をつけ、コミュニケーションだけでなく、主体性が養われていく生徒も多くなります。」というような話をしました。このことは分校生徒にも大いに言えることです。

中国の王羲之の言葉に、「非人不佞」というのがあります。私は、「人権意識の希薄な人にふるまいを語っても意味がない」と解釈しています。これになぞらえて、「あたりまえのことをあたりまえとしか見えない人、あたりまえでないことを有り難いことだと考えて感謝ができないような人に感性を磨けない」と考えています。

学校で、報告・連絡・相談を徹底することは大事であり、あたりまえのこととしがちですが、報告しなさい、相談しなさい、それがあたりまえの姿勢だと逆にそれが徹底しないというようなことも講話で話しました。報告・連絡してくれてありがとう。相談してくれてありがとうという気持ちを持つことが、徹底にもつながるということです。

この講話の最後に、先日聞いた講演から、自己肯定感を高めるための話をして終わりました。「やる気を出すために、人との比較でなく自分との比較をすること。クラスで何番でなく、自分が前よりどれだけ成績が上がったかの視点が大事。私はマラソンを通してそれを特に実感しています。」

今年の12月、久しぶりに国宝松江城マラソンがあります。第1回目の目標は完走。へろへろになりながら制限時間内になんとかゴールできました。第2回目の目標はサブ5(42.195kmを5時間以内で完走すること)。なんとかぎりぎり達成できました。全体順位や年代別順位で見たら全然だめですが、目標を達成できたことに自信ができました。年齢をどんどん重ねていますが、今回の目標はサブ4.5として努力を重ねたいと思います。



○「四国の魅力①」 ひょうたん島周遊船から徳島市の眉山（びざん）を臨む⇒

10月に本校2年生が四国に行きます。台湾研修旅行の予定でしたが、コロナ下のため今年も実現することができませんでした。しかし、一昨年度は全面中止、昨年度は県内の日帰り2日間での実施であったことを考えると、県外2泊3日の研修旅行ができること、尽力いただいた関係教職員や何度も調整していただいた旅行者の方、生徒、保護者の皆様の理解に深く感謝するばかりです。



私をはじめ四国に足を踏み入れたのは大学受験の時でした。旅行が今ほど盛んでなく、中学校の修学旅行で新幹線に乗って感動した時代で、高校では研修旅行もなく、少なくとも私は県外と言えば都会地に行くことがほとんどでした。

出雲から高知までの道のりは長く、岡山まで列車で4時間、そこから宇高連絡船の出る港のある宇野までさらに1時間。連絡船に1時間乗ったあと、高松から高知までさらに列車で4時間、合計10時間以上かかりました。1日かけてやっと到着する感じてした。それが、今や高速道路を使えば、高知までその半分の時間もかけず行くことができます。本当に便利な時代になりました。

はじめて四国の高松に着いた時は、空が高く感じたことを覚えています。また、高松駅が最終終着駅で一畑電鉄の大社駅のような感じてあったこと、讃岐平野の山々が出雲平野で見る山並みの感じと違うことなど、受験の緊張感も忘れ、見るものすべてに関心が行き、最初だけは10時間以上の道のりも長く感じなかったことを覚えています。

今回の研修先一つでもある香川県の琴平町にある金比羅宮に行ったのは大学4回生になった時でした。夜明け前に高知を出て、金比羅さんに着いたのが朝8時くらいでした。「こんぴらさん」で有名な金刀比羅宮は、古来より海の神様、大漁祈願・商売繁盛などの神様として信仰をあつめてきた神社です。参道口から御本宮までは785段、奥社までは1,368段の石段があることでも有名です。お金を出せば駕籠舁（かごかき）さんが御本宮まで運んでくれます。その駕籠に○が3つ、4つ書いてあるのを見てなんだろうと思いました。答えはすぐわかりました。朝から何回お客を上まで運んだかの印だったのです。私はといえば、785段で疲労困憊。2度目に訪れたのがコロナの広がる直前の令和2年1月。その時はじめて1,368段登って奥社まで行きました。

四国と言えば、お遍路さんも有名です。阿波（徳島県）の1番札所を最初に、弘法大師（空海）ゆかりの八十八ヶ所の霊場を旅する人のことです。四国ではあちらこちらで目にします。お遍路さんがかぶっている菅笠（すげがさ）には、「同行二人」の文字が書かれています。一人で歩いている人もいるのにどういう意味だろうと不思議に思っていました。一人は自分、そしてもう一人は弘法大師ということの意味すると知ったのは教員になってからでした。弘法大師様と二人で巡礼の道を歩く、それがお遍路なのです。4回生になって卒業論文や就職活動・試験の合間に気分転換をかねて少しずつ八十八ヶ所巡りをしましたが、結局半分もいかず、もう35年以上中断中です……。



## ○「イノベーション」

徳島の夏の風物詩「阿波踊り」⇒

10月の本校2年生の四国研修旅行の行き先は、徳島と香川です。中学校の修学旅行や高校の研修旅行の行き先は、これまで多くの学校で企業や大学、歴史・文化遺産、遊興施設などが集中する都会地に設定してきました。コロナ下で、県内や地方に目を向ける学校や人も多くなり、その魅力や価値が再発見されてきています。



そもそも、現代社会においては、他者による評価、つまり社会が創り出した価値尺度によって、自己実現の達成度を評価してきた部分があると思っています。例えば、大企業の社長になることで成功したと自他ともに思うことなどです。他者評価が柱であり主体であるがゆえに、社会的に価値が高いとされるものが多く集中する都会地を人々がめざしてきた側面があるのではないのでしょうか。「東京で成功したい」という言葉を昔よく耳にしたのは、成功の尺度や要素、機会が都会地に多くあることの証左だと思っています。

しかし、これからの情報化社会では、人工知能(AI)により必要な情報が必要な時に提供され、その情報を上手に使いながら課題や困難を克服していく社会となっていきます。その社会において大事なことは、どこにいるかよりも、情報を正し的確に得て使うことだと思います。また、主体的に様々な分野のヒト・モノ・コトに関わりながら、分野を超えて様々な知識や情報を横断的に共有する人々がチームとして協働し、新たな価値を創出できるかだと思います。その中で見出した価値により、各個人が自己実現の判断ができるようになることが大切だと思います。

言いたいことは、既存の価値のもとで動くのではなく、これからの社会では、自らが、あるいはチームで価値を創り出して行こうとする姿勢が大事だと言うことです。必ずしも都会地でないと価値の創造ができないことはないこと。つまり、場所でなく人が大事だと考えています。

先日島根大学材料エネルギー学部が正式認可されました。物理や化学を学ぶ生徒が進学先に考える工学部系です。これは、島根から価値を創出して行こうとする強い姿勢のあらわれと思っています。島根大学のHPIには『エネルギー問題を解決するカギは「材料・素材」が握っていることを、あなたは知っていましたか？例えば飛行機。エネルギー効率のいい航空機エンジンが生まれるには、少ないエネルギー消費で高い性能を持つエンジン用の素材が開発できるかどうかにかかっています。「イノベーションの創出は材料が握る」と言っても過言ではないほど、材料の研究開発には、社会を大きく変える力があります。』と説明されています。

イノベーションは技術革新と訳されますが、モノ、しくみ、サービス、ビジネスモデルなどに新たな考え方や技術を取り入れて新しい価値を創出し、社会に大きな革新をもたらすことです。

来月からノーベル賞が発表されます。ノーベル賞は、科学技術の発展や平和に貢献した人に贈られます。青色発光ダイオード(LED)の開発でノーベル物理学賞を2014年受賞された米カリフォルニア大の中村修二教授は徳島大学の出身で、地元企業の日亜化学工業で研究をされたことが開発のスタートとなっています。地方からの価値の創出です。生徒のみならずもいろんな価値を、再発見し、イノベーションを創出する人になってもらいたいと思います。



## ○「四国の魅力②」

徳島ラーメン「いのたに本店」にて撮影⇒

四国と山陰とは似ているところがあります。例えば、新幹線が通っておらず、寝台特急が未だに残っていることもその一つです。サンライズ出雲・瀬戸は東京から岡山まで連結運行しています。バブル期前後、高知県は国民休暇県構想を打ち出していました。リフレッシュリゾート島根だったと思いますが、同じような構想が島根県にもあったと記憶しています。高齢化率も上位を争ってきました。



バブル期の地域活性化は、箱物と呼ぶような美術館を建設して、著名な芸術家の作品を集めることで観光客を誘致するようなことが少なからずあったと記憶しています。その後の収益等を考えない、公共施設の建設に重点を置く政策を批判して箱物行政という言葉もありました。

今回2年生が研修旅行で訪れる徳島県名西郡神山(かみやま)町で活躍する認定NPO法人グリーンバレーは「日本の田舎をステキに変える！」をミッションに、ワーク・イン・レジデンス、サテライトオフィス支援事業、コワーキングスペースなどの事業を展開されています。

神山型と言われるワーク・イン・レジデンスとは、仕事を持ち、仕事を創り出してくれる人を誘致することに重きをおきます。例えば、一時的にでも制作活動に訪れる芸術家を呼び込む。そこでの滞在満足度を上げる。つまり、場の価値を磨く。そのために自費滞在する芸術家への支援策を講じる(お試し滞在施設の整備など)。やがて芸術家のつながりで様々なジャンルのクリエイターがやってくる。クリエイターたちが互いに知り合い、顔の見える関係を築くための新しいコミュニティづくりをしていく。このようなコンセプトで町づくりをし、町の発展をめざすのです。つまり、神山町では町の将来にとって必要となる「働き手」や「起業家」を逆指名しているのです。

神山町はIT企業の呼び込みでも成功しました。これが、サテライトオフィス支援事業です。IT関連企業を中心にサテライトオフィス設置だけでなく、本社を移転した企業もあります。iphoneが発売された2007年には全国に先駆けて光ファイバー網が整備されたことによります。小川のせせらぎの中で普段着のままパソコンを開き仕事をする風景が神山スタイルです。来年度起業家たちが創る新しい学校、神山まるごと高専ができることもメディアで話題になっています。

グリーンバレーの理事、大南氏の講演を徳島であった研究大会で聴いたことがあります。演題は「『神山プロジェクト』～地域に誇りをもち、創造力豊かな子どもを育てる～」の中で、創造的過疎という言葉が使われました。過疎を克服するのではなく、多様な働き方を実現できるビジネスの場としての価値を高める。過疎化問題とは、少子高齢化、人口流失の克服としてだけ捉えるのではなく、「雇用がない、仕事がない」課題の克服と捉えることだと理解しました。

「Café on y va」(カフェオニヴァ)」という店の話も印象的でした。丁寧に暮らすをモットーに、週休3日で年間60%が休み。休みは個人のプロジェクト(趣味等)に挑戦し、そこから新たなビジネスを創出していく。ワーク・ライフ・バランスとは、時間と仕事(夢)のバランスと認識しました。

図書館も独創的。借りる図書館でなく預ける図書館。人生で影響を与えた3冊を厳選して町民が収蔵する。収蔵した人のみ図書館の鍵がもらえるというもの。預けるのは人生の転機となる3回のみ。卒業、結婚、退職の時とのこと。隠された図書館とも言われるそうです。

「人は見たものしか信じない。神山は、問題だらけで成り行きの未来だが可能性を感じる場所、上がりのない双六をしている感じ。」とは大南氏の言葉。神山で学びがありますように…。



## ○「四国の魅力③」

鳴門の渦潮⇒

「北の風3ノット、潮流は南向き2ノットの中で船が航行していたとする。風向きと潮流(潮の流れ)の説明で正しいものを選びなさい。」という問題を、掛高基礎力テストで出題しました。

解説では、危険なことの察知として向きを考えるというような話をしたと思います。具体的には次のとおりです。

\*風はどの方角から吹いてくるか → なにかが飛んで来る方向、(ヨットが風を受ける方向)

\*潮流はどの方角に流れていくか → 流されていく方向

ちなみに、海流は広い海を常に一定の方向に流れる大きな流れ。潮流は、鳴門の渦潮のように潮の満ち引き(潮汐)により、海水が周期的に変わる流れ。海水浴場での事故につながるのが離岸流で、海岸に打ち寄せた波が沖に戻ろうとする時に発生する強い流れです。

昔ヨット部の顧問をしていて、瀬戸内海であったレースに引率したことがあります。潮流が早く、スタートしてヨットが風を受けているのに、進行方向が潮流と逆だったため、スタートラインから後退していったことがありました。結局レースは不成立となりました。関門海峡では、「E7↓」のような海上標識を見ることができます。「E:潮流が東向き、7:流速7ノット、↓:流れが次第に遅くなる」という意味です。1ノットは、1時間に1マイル(約1,852m)航走する速度です。水産高校で見ると手こぎのカッター(大型のボート)は、こぎ手にもよりますが、約4ノットの速さが出るそうです。少し頑張れば歩く速さくらいでしょうか。7ノットなら、一生懸命漕いでも後退することになります。源平合戦の壇ノ浦の戦いで、潮流を味方には源義経が勝利したことは有名な話です。潮流の早さは10ノットにもなるという瀬戸内海の難所は、「一に来島、二に鳴門、三と下って馬関瀬戸(=関門海峡)」と昔から船乗りたちに恐れられてきたそうです。

私が大学時代を四国で暮らした時期は、瀬戸大橋も、明石海峡大橋も、尾道今治ルールの来島海峡大橋も開通しておらず、必ず船で四国と本州を行き来していました。鳴門大橋はたしか大学2回生の時に開通しました。橋をはじめて渡った時、その橋の大きさに感動したことを覚えています。橋にばかり関心が行き、渦潮をきちんと見たことは正直ありませんでした。約10年前にはじめて渦潮観光船に乗り、間近で渦潮をみました。自然の偉大さを目の当たりに、ただただ感動しました。

徳島と言えば、鳴門の渦潮が有名ですが、一番は阿波踊りではないでしょうか。約10年前にはまってコロナ下となるまで毎年観に行っていました。江戸時代から約400年続く伝統芸能で、「踊る阿呆(あほう)に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損々」と言ってグループで踊ります。

他には、「すだち」や「鳴門金時(さつまいも)」なども有名です。すだちは研修旅行で行く神山町で商業生産が盛んになったことがはじまりで特産品になったようで、全国の生産量の9割以上を占めます。また、研修旅行の時期は、ちょうど鳴門金時の収穫期です。歴史の教員としては阿波藍にも関心が行きます。藍染めの青い色は、「JAPAN BLUE」として世界的にも有名な日本を代表する色で、サッカー日本代表のユニフォームも「ジャパンプルー」です。吉野川の氾濫を逆に利用する形で、江戸時代徳島藩主蜂須賀氏が奨励して盛んになりました。

他県のことを知ることは、ふるさとの再認識、再発見する契機にもなると思っています。





○「地形図」平成25年度島根県高校入試→  
毎年島根県の高校入試社会科の地理問題で地形図が出題されています。右は(※裏面参照)、平成25年度高校入学者選抜の問題です。徳島市を題材にした出題で、「阿波おどり会館」に訪れる設定で問題が作成されています。

これまで多くの地域の地図が入試問題に使われてきました。行ったことがある場所もあれば、見知らぬ場所もあります。見知らぬ場所が出題された時は、その場所へ行ってみたいくなる時もあります。

その一つが、さくらんぼ東根駅のある東根市です。果物が駅名になっていることに惹かれたからで、ここではマラソン大会も開催されています。いつか大会に出場することで訪れてみたいと思っています。

受検生は、地形図から読み取れることから一生懸命問題を解くのですが、中には地図を眺めながらそこに広がる景観を再構成する読図能力が必要となる問題もあります。徳島市眉山の問題や、数年前の函館山の問題などは、行ったことがあるので、景観を思い浮かべながら地図を見て解いてみることができました。その逆は…。

最近では、スマホで地図を衛星写真やストリートビューで見ることができます。また、カーナビでは立体的、つまり3次元的に地図を見ることもできます。このため、2次元の地形図から3次元の景観をイメージすることができる力が、難しく言えば想像力や推理力が弱くなっている人もいるかもしれません。そういう意味でも地理の学習は大事です。

若い頃に車で出かける時は、今のように出発時にカーナビに行き先をセットしてから出発するのではなく、ドライブマップで行き先までの道を下調べしてから出発したものです。マップではわからない便利で大きな道があったり、近道があったりします。その発見もドライブの醍醐味の一つでもありました。また、道を間違えて思わぬ発見をしたりすることもありました。

家族旅行や受験旅行などで県外に列車で行く時は、時刻表などでスムーズな乗り換えや最適な路線などを調べてから出発しました。乗り換え時間がどれだけあればいいかわからず、乗り換えに失敗することもありました。それが旅のおもしろさでもありました。今は、スマホですぐ最短で最適なルートを検索することができます。時間の短縮、失敗のない旅行にはつながりますが、それでよいのか考えてしまうこともあります。行く先の立ち寄り先も同じです。いろいろ調べてから行かないと、昔は今ほど簡単に情報が手に入りませんでした。今は、関心がある場所だけでなく、インターネット等でみんなが良いとするところをなぞっていく感じにもなっています。

研修旅行に行く際も、事前にどれだけ行く場所に関心をもつか、また自分なりに調べていくかで学びや思い出も全然違ってきます。登山も、頂上に立つことだけが目的ならヘリコプターで連れて行ってもらえばそれで終わりですが、それでは感動はあまりなく、思い出にも残りにくいと思います。「景色がきれいだな〜」くらいで終わると思います。登山の準備、登山のしんどさなどを含めた頂上の景色なら、雲が多くて景色が十分に楽しめなくても思い出に残るはずですよ。

学習、部活動、旅行…なんでも主体的に、つまり自分で取り組んでいく姿勢が大事です。簡単さや便利さだけを追い求め、結果だけを重視して過程を軽視すると、得るものは少ないかもしれません。研修旅行が良い学びや思い出につながることを願っています。

問9 下線部(㊄)について、みなみさんは発表後、実際に徳島市にある「阿波おどり会館」を訪れてみた。地図③はその時に使用した地形図である。これを見て、次の1〜3に答えなさい。  
2 「阿波おどり会館」を訪れたみなみさんは、「眉山ロープウェイ」に乗った。頂上に向かう車窓から〇印の地域を見たときの写真として最も適当なものを、次のア〜エから一つ選んで記号で答えなさい。(写真省略)  
3 みなみさんは、「阿波おどり会館」から「とくしま」駅に帰る途中、ある施設に立ち寄った。次の説明文は、その道順を示したものである。みなみさんが立ち寄った施設を答えなさい。(正解は、図書館)



〔地図③〕は、実際の掲載地図の上下各1/3程度を削愛し、問題文等のレイアウトは、適宜変更している。



## ○「豊かさとは？」

研修旅行先ホテルでの夕食の風景⇒

第46回島根県高等学校演劇発表大会で、本校、分校がともに最優秀賞をとり、アベックで中国大会出場という快挙を達成しました。分校の演目は、「走れ！山月記」。キャストは分校の演劇同好会1名という一人芝居でしたが、スタッフである舞台監督、照明、音響、舞台の各係は本校演劇部10名が担う本校・分校のコラボ作品でもありました。そういう意味でも意義深い演劇となりました。



本校の演目は「ローカル線に乗って」でした。この演目では、豊かさとは何かを、木次線の存続と存在意義を昭和・平成へのタイムスリップを通して考える内容でした。

先月本校2年生の徳島・香川への研修旅行が終わりました。徳島県神山町がメインで、神山町で暮らす人・働く人との町歩きやワークショップ「神山町研修プログラム」で“自分らしい働き方とは？暮らし方とは？”について考える契機となることを期待した研修でした。

神山町は、都市圏のIT企業等がサテライトオフィスを置くパイオニアの町として有名です。しかし、見方を変えれば、スマホを含むITを使う環境が大きく変化しただけとも言えます。スマホ等をあたりまえに使うIT社会から逃れることはできない前提があるとも言えます。その中で、ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)を最大限重視した町とも言えるのではないのでしょうか。

先日、伊豆に移住したある女性のドキュメンタリー番組を観ました。都会の広告会社で働いていたが、スマホを四六時中気にしていないといけな仕事だったため心身ともに疲弊し、休養のため伊豆の海に潜りに行ったそうです。その時スマホから完全に遮断された時間がとても心地よくて、そうしたら伊豆の自然が素晴らしく映って移住を決めたというものでした。

公演や講演等でよく「スマホの電源をお切りになるかマナーモードにしてください」と言われます。今回の演劇発表会では、「スマホ等の電源はお切りください」とアナウンスがありました。なにかとてもほっとした気分となり、上演中は完全に劇に没頭できました。マナーモード中に振動があると、その内容が気になり、かといって確認することもできず、目の前の公演等に没入できないことがままあります。しかし、完全に電源を切るには勇気がいることも確かです。だから主催者側から電源を切るという一択が示されたことは、スマホ社会に生きる自分にとっては、別な安心感を覚えたのだと思います。平たく言えば、即座に対応しなかったのは自分のせいではないという言い訳ができたということでしょうか。

最近、ある全寮制の高校の校長先生と話す機会がありました。学校の立地状況からスマホ等がつながりにくいこともあり、生徒のほとんどはスマホがないことに不自由していないとのこと。全寮制でもあることから、会話は直接することがあたりまえとなっているということでした。

演劇の場面では、スマホを持つ令和の女性が、昭和や平成時代のスマホを知らない乗客の乗る木次線の列車に乗り合わせるところから本題に入っていきます。知らないことがわかったり、知らない誰かとつながったり、スマホの生み出す世界は無限かもしれません。一方で、見えるはずの世界が見えなくなっていたり、深くつながっていきけるはずの関係が希薄のままだったりすることもあります。そこから、人間関係のトラブルがおきることもあります。

私たちは、普段言いにくいことをスマホ(SNS)で伝えることがしばしばあります。電話や会話はリアルタイムなので相手の事情に関係なく相手の時間を確実に使うことになりませんが、SNSなら相手の都合のよい時間に自分の考えを伝えることができます。そのため、遠慮がなくなることもあります。本校では、8日に人権・同和教育の1年生のLHRで、SNSを題材に「様々な価値観を尊重できる人になろう」というテーマを扱いました。気づける感性は養われたでしょうか……。



○「続 豊かさとは？」 椎葉村-仙人の棚田 (宮崎県観光協会 HP より) ⇒  
「日本三大〇〇」というように、代表的なものを三つであらわす  
ことがあります。例えば、日本三景。松島(宮城県)、天橋立(京都  
府)、宮島(広島県)は有名です。昔はインターネットもなかったので、  
趣味の切手収集などで日本三景を知り、切手を眺めては本物を



見たいという気持ちになり、図書館で旅行雑誌や写真集を探したこともあり  
ました。サザエさんのエンディングで素敵な場所を知り、いつか行きたい  
気持ちになったものです。今は、インスタ映えという言葉があるように、  
スマホなどで容易に日本や世界の素敵な場所を共有することができます。  
日本三大夜景というのがあります。多くは、札幌市大倉山、神戸市摩耶山、  
長崎市稲佐山から見る夜景とすることが多いようです。それが世界三大  
夜景となるとなぜか、香港、函館、ナポリとなるようです。人の感性は  
まちまちだということでしょう。残念ながらナポリの夜景は見たことは  
ありませんが、個人的には香港よりも函館の夜景が日本三大夜景と  
比べてもかなり素敵だと思っています。

先日、分校2年生研修旅行の事前学習で「島根を元気にする活動に取り組む視点とは」  
と題して県教委教育魅力化特命官の岩本悠氏の講演がありました。「海士町や  
隠岐島前高校の魅力化に取り組んだ際に、最初は自然があるとか、都会に  
ないものがあるという点をアピールしてきた。実際来てみると思った  
ほどでないと思う人もいて、期待と実際に対する感覚の違いからうまく  
いかなかった。しかし、“ない”ことを売りにしたらそれがなくなった。  
発想の転換で見方は全く違ってくる。」という話がありました。「知名度が  
低く訪問者が少ない場所も、秘境と銘打てば人の見る目が変わるよう  
になる。これも発想の転換。」という話もありました。ちなみに、日本  
の三大秘境は、合掌造りの集落が残る岐阜県の世界遺産の白川郷。清  
らかな溪谷にあるかずら橋で有名な徳島県の祖谷(いや)。最近知った  
場所でぜひ行ってみたいと思っている焼畑農業が世界農業遺産に認  
定されている宮崎県の椎葉村(しいばそん)の3か所です。

フリーアナウンサーの河野景子氏の講演を聴く機会がありました。相撲部屋である貴乃花  
部屋のおかみさんもされていた方です。貴乃花部屋は2010年から椎葉村で合宿を  
されました。景子氏の恩師が退職してこの村で教員のための心の教育をする塾を  
されていたことがきっかけだったそうです。日本人として、力士としてどんな生  
き方をしていけばいいのかを話して欲しいという依頼をしたそうです。条件は、東  
京で力士に話すのではなく、なにもない不便な椎葉村で話すこと。宮崎空港から  
大きい力士を車に乗せて狭く険しい山道を何時間もかけて行ったそうです。携  
帯もつながらないこの村で、自分や相撲と向き合う時間がとても有意義で、仲  
間同士の絆も深まり、力士は不満どころかまた行きたいと口々に言ったそう  
です。

本校演劇部が上演した「ローカル線に乗って」で、みんなで坂本九さんの「上を向  
いて歩こう」を大合唱するシーンがありました。私の初任地は隠岐でした。20代前  
半だったこともあり、また瀬戸大橋の架かる前の四国で大学時代を過ごしたこ  
ともあって、自分の力では本土に行けない不自由さや、フェリーが欠航すると  
スーパーから物がなくなるなどの不便さなどから、最初はカウントダウンカ  
レンダーをつかって過ごす日々でした。一人で歩いて帰るような時に、よく夜  
空を見上げながらこの歌を口ずさんでいました。今でもスマホの朝のアラーム  
音楽にしています。ですが、隠岐での4年間は教員人生で大事なものをたく  
さんもらいました。隠岐に赴任した時に出版された岩波新書『豊かさとは何  
か』。今読んだらまた違う感想になるかもしれません。





## ○「自立とは？」

先日、海老原宏美さんの最期の講演を録画映像で視聴する機会がありました。映画「風は生きよという」の主人公でもある彼女は、映画の出演者紹介によると「1977年神奈川県出身。生後1年半で脊髄性筋萎縮症と確定診断を受ける。小学校から大学まで地域の学校に進学し2001年の韓国縦断野宿旅で障がい重度化、02年より人工呼吸器を使い始める。01年より東京都東大和市で自立生活を開始…」という方です。脊髄性筋萎縮症とは、体幹、腕、脚などの運動をつかさどる



脊髄の細胞に異常が生じることでしだいに筋力低下と筋肉萎縮が生じる病気で、乳児期の発症が重症化しやすく、自分の力で呼吸ができなくなるため人工呼吸器が必要となるそうです。この人工呼吸器からの風が生きよと言っているという意味での映画タイトルです。

人生の礎とはなにかという話の中で、「かわいそうな子でなく、少しでも社会の役に立つ子になってもらいたい。少しでも自立した人生を歩める子になって欲しい。」という親の願いや期待もあって、自立のためにがんばったことが人生の礎となったという話がありました。それは、自分にかかけられる期待そのものが、自身の存在の肯定にもつながったという意味だと理解しました。

就職や進学面接や志望理由書の中で、「人の役に立ちたい」というフレーズをよく見聞します。ここで使う「人の役に立つ」の意味は、人に助けられている面と人の役に立っている面があるとすれば、人の役に立っているとの実感が大きい状況をイメージされているかもしれません。また、「ありがとう」と言ってもらえる仕事などがイメージされていることも多いと思います。仕事によっては、「人の役に立つ」が、「社会の役に立つ」とか、「ふるさとの役に立つ」というフレーズになることもあります。一方、人に助けられている迷惑をかけているという実感が大きいと、自己有用感や自己肯定感が低くなりやすいと思います。

しかし、役に立つことに大小はなく、またそれが誰かの助けを借りてなしえたことでも意味や意義はあると思っています。そもそも一人ですべてをなしえたり、誰かの役に立ったりすることはほとんどなく、組織やチーム等で取り組んでいることがほとんどです。

海老原さんの話を聞きながら、役に立っている実感があることも「自立」していることにつながると思いました。それは、必ずしも大小の問題ではないということも……。人の手を借りてできることがあれば、それはそれで意義があること。人の手を借りられる勇気をもっていること、それも自立の形の一つであるとあらためて思いました。人の手を借りるには勇気がいります。例えば、道を尋ねることも勇気がいります。でも、尋ねられたり、助けたりすることは、その人の自己有用感にもつながります。見方やとらえ方を変えれば、いろんなことや行為が人の役に立っているのではないのでしょうか。「〇〇してあげている」というような感情を持たず自然と助け合っている。それがお互いのエネルギーになっていくのが共生社会かもしれません。

文部科学省のHPによれば、共生社会とは「これまで必ずしも十分に社会参加できるような環境になかった障がい者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である。」としています。海老原さんは、「ここにいて良い条件をつくらない社会」と定義されていました。条件をつくと、条件にあてはまらない人を排除する社会になるということです。その意味を考えかみしめているところです。



## ○「自立とは？(つづき)」

国立教育政策研究所の所長をされていた徳永保氏による講演「グローバル社会を生きる力をどう育むか」を聴く機会が10年ほど前にありました。

内容を、理解した範囲で言葉を変えたり足したりしながら要約すると…

企業が売り上げの大半を海外に求める時代であり、そのため世界の国々の間でグローバル人材の育成と人材獲得競争がおこなわれている。人材評価の国際化もすすんでおり、米の飛行機メーカーではグローバル人材の共通評価がすでに導入されている。国際バカロレア資格もこうした流れの一つである。



アメリカの大学での学びは実践的なものが多く、大学でどれだけスキルや能力を身につけたかが就職での採用基準となっている。一昔前の日本は、労働力の質の高さを、スキルや能力でなく学歴や勤勉性に求めている、世界的にも勤勉性が高く評価されてきた。実際は、若年人口が多く、玉石混交でもやっていける時代で、スキルや能力のある人が評価されてきた一面もあったと思われる。今は、国内に就職しても海外で働くのがあたりまえの時代である。そのため、実践力のあるグローバル人材の育成が求められている。見方を変えれば、人材育成をしっかりとしないと、少子化のため、玉石混交ではやっていけない時代でもある。しかし、企業には昔ほど人材育成にける体力がなく、学校教育でも育成が求められている。こうした情勢の中で、日本の子どもたちの表現力は上がってきているものの、子どもが少なく、まわりの大人が様子を気遣ってくれるので、コミュニケーション力や自己決定力が低下している現状がある。例えば、「お腹が痛いから保健室に行きます」と言わなくても、顔色見て先生が「大丈夫？」と言ってくれたり、「保健室行きなさい」と言ってもらえたりするのが今の子どもたち。体調が悪くて学校に行こうか迷っていても、親が「体調が悪そうだから学校に欠席の連絡を入れておくれ」と先走ってしまうことが多く、自己決定力がなくても過ごせてしまうのが今の状況。コミュニケーション力のないまま大人になると、親が会社に欠勤の連絡をする時代である。またこれに加えて子どものリアリティ(実体験)不足も関係しているのか、就職で重要視される論理的思考力やコミュニケーション力がないことを露呈する大学生が多くなっている。こうした状況の解決方法の一つとして、科学的根拠に基づく学習方法の研究である学習科学が注目されている。例えばある学校で、パソコンの文字を見せるのではなく、自筆の文字でプリントを配ることで、ミラーニューロンが刺激された例がある。ミラーニューロンとは、他人の考えていることがわかったり、他人と同じ気持ちにさせたりする脳内細胞のことである。ヘテロジニアス(異質なものを意識し提示することで、教育の本質である「まねぶ(真似る)＝学ぶ」ができるようになるのである。こうした学習科学の考えがこれからは重要となる。学習科学は、認知心理学や脳科学の知見を基礎にしつつ、効率的な学習のあり方などを研究する学問である一方で、学習者の主体的な取り組みを重視するものである…

このような内容でした。グローバル人材の育成をめざした国際バカロレアは、生徒の主体性を養う教育で、国際的視野を持つ人材の輩出をめざす国際的な教育プログラムとして、世界各国の大学入学資格を得ることができる国際バカロレア機構(本部:スイス)が提供するものです。鳥取県立倉吉東高校が山陰初の認定校に今年10月になったばかりです。

自立している人の特徴の一つに、頼まれたことだけをやるだけでなく、必要なことを自分で考えて主体的に行動できているかがあると思っています。それを磨くのが学習や部活動です…



## ○「道楽」

「道楽」を『広辞苑』でひもとくと、「①本職以外の趣味などにふけり楽しむこと ②ものずき ③酒やかかけごとなどの遊興にふけること」とあります。その意味から道楽者、道楽息子という言葉もあります。あまりいい意味では使われていないようです。「道」がつく言葉はいろいろありますが、ここでは柔道、剣道、華道、茶道、武士道のように日本の伝統文化に関わるものに注目したいと思います。



この場合の「道」は、『広辞苑』の「道」の意味の中の、おそらく「方面、分野、そのむき、(使い方の例)その道の達人」になるのでしょうか。また「(道のりが転じて)人が考えたり行ったりする事柄の条理や道理」という意味もあるので、そちらも混じっているかと思います。

「道を究める」と言った場合の「道」も、修行や修練がともなう柔道、茶道などの「道」のイメージかと思います。修行や修練には「守・破・離」という段階をあらわす考えがあります。「守」は、師や流派の教え、型、技を忠実に守り、確実に基本を身につける段階。「破」は、師や流派にこだわらず良いものは取り入れて発展させる段階。「離」は、流派から離れ、独自の新しいものを生み出し確立させていく段階。

そういう段階を経ながら、つらく厳しい修行や修練の末に到達することを「道を究める」というのでしょう。厳しい道のりだったからこそ、やり抜いたからこそ見ることのできる新しい景色。それを楽しむ感動こそが「道楽」だと思っています。挑戦し、考え、努力を重ねたからこそその感情です。

学問や勉強もそうだと思います。「ローマは一日にしてならず」「学問に王道なし」…学校での勉強も、勉強道です。知識の習得だけでなく、主体的に思考したり判断したり表現したりすることを重ね探究していく中で、悩み苦しみながら努力を重ねていくことで、本当の意味で学んでいて楽しいと思える時がやってくるのだと思います。部活動も同じです。

サッカー日本代表の監督だったオシム氏は、考えて走るサッカーで日本サッカー界に旋風を巻き起こしました。サッカーは足でやるスポーツではなく、頭でするスポーツとし、ただ走るのではなく、試合で起きる様々な状況の変化に応じて、選手個々がどう考え判断するかが大事なスポーツとされていました。今のサッカー日本代表の久保健英選手も、スペイン留学で常に主体的に考えていないとついていけない練習で上達したという話を聞いたことがあります。何事も「待ち」の姿勢でなく、挑戦していく主体性、究めたいという志が大事だということです。

昔のイタリア映画に「道」というのがあります。はじめて観たのは40年近く前ですが、映画にかつてないメッセージ性を感じました。そのメッセージが何か見るたびに思いが変わる映画です。貧しいイタリアの沿岸部で暮らすジェルソミーナが、口減らしもあって旅芸人のザンパーノに売られるが、怒鳴られながらも芸人の仕事を覚えていく。そして、粗暴で酒好き、礼儀も優しさもないザンパーノに尽くすも、あることをきっかけにジェルソミーナが心を壊していく。そんな物語です。「道」の映画の音楽は、フィギュアスケートの高橋大輔選手がバンクーバーオリンピックで使っていた曲なので聞いたことがある人もいます。高橋選手は、銅メダルを獲得するまでのこれまでの厳しい道のりを思い出しながらこの曲で踊ったと思います。映画のタイトルがなぜ「道」なのか知りません。しかし、どんな道も前を向いて歩いていけば何かが見えてくるはずですよ。

先日国宝松江城マラソンに出場しました。いろんな選手のTシャツの言葉にも励まされながらなんとか完走しました。一番印象に残った言葉が「しんどさはやがて消える。あきらめた気持ち持ちは一生残る。」という言葉でした。30キロ過ぎから何度もこの言葉が頭をよぎりました…



## ○2学期終業式講話「命の尊さ」

令和4年もあとわずかとなりました。コロナ禍の生活も3年が経ちました。そんな中、我慢強く感染症と向き合ってくれていることに感謝するばかりです。2学期は、学校行事や部活動ではつらつとした姿を見ることができ、研修旅行では楽しそうな顔を見ることができ、本当に嬉しく思います。一方で、毎日のように新規患者数が発表されていて、その数の多さに麻痺すら覚えることもあります。亡くなられた方はすでに5万人を超えました。



今年9月に本校で広島市在住の三浦さんを講師に「命の大切さを学ぶ教室」がありました。これまでこうした講演を、本校・分校で定期的に行っています。今回は、斐川町にお住まいの江角さん夫妻の講演でした。約3週間前の山陰中央新報でも取り上げられていました。江角夫妻は、1999年12月次女の真理子さん(当時20歳)を相手の飲酒運転による交通事故で突然亡くされ、それからの長い年月、癒えない気持ちと向かい合いながら、講演活動を20年以上続けておられます。当時高校生だったご長男の3年担任をしていたこともあって、弔問に行った日の事を今でも思い出します。命の大切さを身にしみて感じた瞬間でした。先日、三刀屋高校や掛合分校の活躍を再三見聞きし、エールを送りたいと江角さんから連絡がありました。その最後に「12月は命日病になります」とありました。胸にこみ上げるものがありました。

1999年に3年担任をした時は、生徒の家が深夜火事になり焼け出されるなど、命の大切さについて考えさせられる事が他にもありました。中でも、内地留学で2年間学校を離れ、久しぶりに教壇に立った1999年4月始業式の日、生徒が自転車でトラックにひかれ意識不明の重体となった日の事は鮮明に覚えています。それからクラスや部活動、生徒会などの生徒たちと一緒に、目を覚まさない彼を励ましに病院に通う日々が続きました。3か月後彼の生きる力が奇跡を起こし、目を覚ましました。その後懸命にリハビリをして、1年遅れで卒業。1年早く卒業するみんなに寄せた手記が、当時の勤務校のPTA通信に掲載されました。数年後、彼の結婚式での幸せそうな笑顔を見て、親子の絆、友の絆、命の尊さをあらためて感じました。

校長室だより第60号で海老原宏美さんの最期の講演に触れました。その講演で、命の価値について触れておられます。「命の価値は平等という言葉に耳をすることがあるが、命にはそもそも価値はない。価値があるものは、ダイヤモンドのように価値が上がったり下がったりするのである。命に価値があると考えるのは、現代社会が価値を求める社会だからである。役に立たなければいけない、生産性がないといけないうような価値観に縛られている一面があると思う。生きていくというだけでも素晴らしいことではないか。屋久杉や富士山は、ただそこにあるだけで、行けば勇気などがもらえる存在である。価値はそもそもあるものでなく、つくられるもの。命はつくるものではない。あるだけで尊い。だから大切。」と話されていました。

校長室だより第62号で触れた、映画「道」の一場面で『私は何の役にも立たない女よ』と言うジェルソミーナに、綱渡り芸人が『この世の中にあるものは何かの役に立っているよ。』というシーンがあります。命はあるだけで尊く、生きていけば必ず何かの役に立っているのです。日野原医師も言われたように、本当に大切なものは目に見えません。例えば命のように…。絵本『しょうぼうじどうしゃ じふた』のお話のように、その存在には必ず意味があるのです。

有意義な冬休みとなるように学習、読書にしっかりと時間を使ってください。みなさんにとって来年2023年が、素晴らしい年、躍進の年になることを願って、終業式にあたっての話とします。



## ○3学期始業式講話「自分に挑む戦い」 台湾で販売された雪姫舞→

令和4年の世相を表す漢字は「戦」でした。今年はどうな漢字の世相となるのでしょうか。未来がイメージできる漢字の1年であることを願うとともに、一人一人が夢を追いあきらめず挑「戦」する1年にして欲しいと思います。

ウクライナの児童文学作家であるオルロフ氏原作の『ハリネズミと金貨』という絵本があります。あらすじは「ハリネズミのおじさんが道で金貨を拾いました。冬眠に備えて、その金貨で必要なものを買おうとする道中、次々と出会う動物たちが必要なものを譲ってくれるので金貨は使いませんでした。」というお話です。お金本来の意味、なにより人と人が寄り添い助け合い生きることの大切さに気づかせてくれます。

ロシアのユーリ・ノルシュテイン作の『霧の中のはりねずみ』という絵本があります。「日が沈んで薄暗くなってきた頃、はりねずみが、野いちごのはちみつ煮を持って仲良しこぐまのところへ行こうとしますが、その途中立ち込める霧の中で道に迷ってしまいます。しかし、いろんな動物が寄り添い助けてくれ、なんとかこぐまのところまで行くことができました。」というお話です。

戦争の当時国の絵本です。絵本からは、やさしさや寄り添う気持ちしか見えてきません。

ちなみに一番好きな絵本は、『ぼくはくまのままでいたかったのに…』というスイスの絵本です。現代社会の授業で、環境問題を扱うときなどに使ったことがあります。あらすじは「平和な森に人間がきて、木を切りたおして工場を建設。森で冬眠していたクマが目覚めて出ていくと、工場の労働者にされてしまう。」というお話です。自分のことはわかっているつもりなのに、やりたいこともあるのに、言われるがまま行動していたら、アイデンティティを、つまり熊が熊であることを見失っていきます。自分の意志にかかわらず自分が自分でなくなってしまう現実。見失わないためにはなにが大切だったのでしょうか。戦争は、人が人でなくなってしまうものだと思います。

台湾の百貨店で、分校生徒が関わった雲南の焰米(雪姫舞)が販売されました。その台湾には徴兵制がありましたが、2018年から4か月間の軍事訓練の義務だけにしました。しかし、中国が台湾に対する圧力を強めていることや、ロシアのウクライナ侵攻を受け、2024年から兵役を1年に延長すると年末に報道されました。北朝鮮では男女に徴兵制度があります。一方、サッカーのワールドカップ・カタール大会で日本が対戦したコスタリカには軍隊がありません。コスタリカの元大統領アリアス氏は、ラテンアメリカではじめてノーベル平和賞を受賞。国家予算の20%以上を教育にあてるコスタリカ。一方、日本の文教及び科学振興費は5%弱です。

ロシアの文豪トルストイ作の『戦争と平和』。1度読みましたがかなりの長編です。ナポレオンのロシア侵攻による戦争を描いていますが、戦争の中で生きがいや幸せとは何かを若者たちが考え学びながら成長していく小説です。その中の言葉に、「人間の考え方には果てしない多様性があるから、どのような真理であっても、二人の人間の頭に、同一に映ることがない」というものがあります。自分の価値観を他者に押しつけようとするのが争いの発端かもしれません。

受験戦争という言葉が昔ほど使わなくなりました。あまりいい意味では使われてこなかった言葉ですが、これを自分との戦いと考えればどうでしょう。また、戦いがお互いや自分の成長のためのものであれば、その戦いも違った見方ができます。部活動も同じです。自分がやりたいこと、めざしたいことのために挑戦し努力する。仲間とライバルと切磋琢磨する…。

3学期、令和5年がスタートします。いろいろな場面で、小さな挑戦、小さな気遣いができる人。大きな志をもって努力を重ねることができる人になってください。今年もがんばりましょう！





## ○「二十四の瞳」

金比羅宮の石段（四国研修旅行にて）→

壺井栄の『二十四の瞳』。小説を読んだり、映画やドラマで観たりしていなくても、多くの人がなんとなくあらすじを知っている小説の一つではないでしょうか。

小学生の頃に松江の本屋さんで『二十四の瞳』を買ってもらい、何度も読んだ事を覚えています。教員を志したのはこの頃だったかもしれません。

ある教育雑誌で「離島・へき地教育には、特別支援教育、人権教育、生徒指導、複式教育などに共通する大事な教育理念がすべて詰まっている」というコラムを読んだことがあります。

1952年（昭和27年）に刊行された『二十四の瞳』の舞台は、小説では「瀬戸内海べりの一寒村」となっているものの、2年後に木下恵介監督によって映画化された時に小豆島が舞台設定されたことで、今では小豆島に映画村まであり、食堂では昭和の懐かしい給食セットも食べられるそうです。かれこれ20年くらい前に、岬の分教場や映画村に訪れたことがあります。小学校の頃に初めて読んだ時、20年前に教員になってから映画村を訪れた時、そして今あらためて映画を観て小説を読み返した時、抱く感情や思いは違っている気がします。

1928年（昭和3年）から終戦の翌年までを描いたこの小説は、主人公の大石先生が本校の小学校から離れている岬の分教場に赴任し、12人の新入生とともに先生として育っていく物語です。やがて、軍国主義が色濃くなり、不況も厳しくなって、登校を続けられない子どもも出てきます。6年生になると秋には修学旅行が行われるのですが、小説では「（時代設定としては、犬養毅首相が海軍の青年将校の凶弾に倒れ政党政治が終わりを告げる5.15事件の翌年）…時節がらいつもの（宿泊ありの）伊勢まいりをとりやめて、近くの金比羅ということにきまった。それでもいけない生徒がだいぶいた。働きにくらべて儉約な田舎のことである。宿屋にはとまらず、（早朝出発の日帰り旅行として）三食分の弁当をもってゆくということによって父兄のさんせいを得た…こんびらは多度津（港）から一番の汽車で朝まいりをした。…石段をのぼっていきながら汗を流しているものもある。…」と描かれています。

コロナ禍にあって、この3年間台湾研修旅行は中止。昨年度本校は石見地方日帰り2日間、今年度は金比羅宮参拝を含む四国研修旅行でした。状況はまったく違うものの、どんな形であれ修学旅行の実施が、多くの生徒にとっていかに大事で、保護者や学校もその思いを大事したいかは変わらないとあらためて感じました。特別支援学校での教頭時代、1、2人の生徒のための修学旅行を引率しました。生徒も、先生も半年以上も前から長い時間をかけ、事前学習を含め入念に準備してきたからか、帰りの出迎えは成就感もあって感動的でした。

小説の最後は、終戦後に同窓会が開かれるシーンで終わります。戦争や病気で半数近くが帰らぬ人となった中で行われた同窓会では、修学旅行の思い出も語られたでしょう。中でも、戦争で全盲になった通称ソソキに、「（何を言われても）平気のへいぎでおられるようになれえよ」とマスノが言うシーンは考えさせられました。この時代は、障がいがある人自身が障がいに立ち向かっていかないといけない時代だったことがうかがえます。

採用になってはじめて赴任したのが隠岐の島にある隠岐水産高校。最初で最後、3年間卒業まで同じ生徒を担当し卒業させました。卒業生は21名。四十二の瞳です。『二十四の瞳』を読み、一番思うことは、教育や学びがいかに大事か、その後の人生に影響を与えるかということです。楽しい思い出が語れる同窓会ができる平和な日々が続くことを願って止みません。





## ○「クリティカルシンキング」

毛沢東による中国の文化大革命で、紅衛兵が掲げた「造反有理」というスローガン。体制に反抗することにはそれなりの理由があり、反乱者こそ正義を持っているという意味にもなります。革命無罪と並び文化大革命の有名なスローガンです。「抵抗権・革命権」といえば、現代社会や世界史で習う近代市民革命(アメリカ独立戦争やフランス革命)に影響を与えたジョン・ロックの考え方です。

造反有理も抵抗権も同じように見えますが、クリティカルシンキング、いわゆる批判的思考の観点に近いのは後者かと思えます。それは、クリティカルシンキングが自分の考えや意見に客観性を持たせるための手法であり、感情や主観に流されずに物事を判断しようとする思考プロセスだからです。クリティカルシンキングでは、「なぜ」「どうして」「本当に正しいのか」といった批判的な問いを持ち続けることが大事です。だから、自分の意見に対しても、「間違っているかもしれない」という批判的な視点を持ち続け、物事の本質を見極めようとしています。

今年の正月に、大学時代のソフトテニス部の同期とオンライン同窓会をやってみました。お互い何十年ぶりのような状況でしたが、体育会系部活動で互いを励まし高め合い4年間を乗り越えた、顔も人もわかっている者同士からなのか、いつものオンライン会議で感じる違和感を覚えませんでした。その同窓会でもっとも盛り上がった話が大学時代の寮のことでした。

私は寮の近くのアパートに住んでいましたが、夜中ストーム【storm】の音が聞こえてくるのがよくありました。ストームとは、本来暴風雨やあらしのことですが、学生寮などで寮生が集団で、寮歌を歌ったり氣勢をあげたりして騒ぐこともします。年末 NHK番組「ドキュメント72時間」のベスト10が放映されていて、北海道大学の自治学生寮である恵迪寮の回がありました。恵迪寮では今でもストームがおこなわれていると知り驚くと同時に、同期の寮生が話していたことを思い出しました。同期の寮生は、特に1回生の頃よく眠そうな顔をして部活動をしていました。寝ぼけながらコート整備をされていてケガをしたこともありました。ある日理由を聞くと、「寮は2人部屋だがドアがない。その意味を先輩に問いかけられ一晩中討論させられた。最後にはなぜトイレにはドアが必要なのか。ドアのない国が世界にはある・・・」というように討論が深まると問いの意味すらわからなくなることがある。明け方空が白んで来る頃には考える力もなくなっている。そんな討論、説教が毎夜だから疲れる・・・」と言っていました。

あたりまえのことをあたりまえとせず問い続ける場の多い学生自治寮での生活。人間的な成長はかなりあったかと想像します。クリティカルシンキングというようなカッコいい言葉はありませんでしたが、不条理なことを押し付けられたりもする中で自分の信念を磨き、物事の本質を見極める力を養う意味では、もうひとつの大学教育の場だったかもしれません。監督のいない学生主体の体育会系部活動の世界もそれに通じるものがありました。ただし、建設的で意味のある問いなどではないことも少なからずあったかと思えます。また、ロジカルシンキング、いわゆる論理的思考も十分でなかったように思います。

当時も今も寮費は安く、同期の寮生の一人は、奨学金で寮費や教材費を賄い、アルバイト代を時折親に送金していました。大学のHPを見ると、今でも3食付き光熱費込みで月額3万円もしないようです。今の学生は、バス・トイレ付きのアパートに一人で住むことが大半です。アパートでオンライン授業を受けることも普通のことになった昨今。私が学生時代に学ぶことができて良かったことは何かを、オンライン同窓会等を通じてあらためて考えた年末年始でした。





## ○「半クラッチ」

クラッチとは何か今の高校生で知っている人は少ないと思います。一方、アクセルやブレーキと言えば、車のペダルだとわかる人は多いと思います。クラッチも車のペダルの一つです。オートマ限定免許というものがなく、オートマの車を買う場合は車の値段が高くなった私の世代では、自動車学校の教習で、半クラッチがうまくできず、坂道発進がある教習ではとても緊張したことを覚えています。



教員を長く続けていると、異動ルールというものがあるため、何度も転勤を経験することになります。転勤は、精神的な負担(ストレス)を抱える理由の一つになります。私も、大学卒業時から数えて、三刀屋高校で13回目の転勤になります。そのうち1年での転勤が4回ありました。そのうち8回が引越しを兼ねての転勤でした。

転勤では、それまでの慣れ親しんだ職場環境や人間関係と分かれて、全く新しい世界に身を置くことになります。引越しが伴う転勤だと、生活環境や日常の人間関係も新たに整えていかないとはいけません。これだけでもかなり精神的な緊張を要することになります。

大学4年間は、まだ瀬戸大橋も開通していない、フェリーで本土と行き来するしかない四国で過ごしました。隠岐への転勤も2度経験しました。陸路で歩いて本土にいけない環境のため、精神的な隔絶感、孤独感、孤立感、寂寥感(せきりょうかん)を覚え落ち込んだこともあります。

3年生が卒業して新しい環境に身をおく春はすぐそこです。高校入学時に味わったストレスとは、また違ったストレスを感じる人がほとんどだと思います。新しい環境にすぐ順応しようとする、その反動が例えば五月病となって跳ね返ってくる場合があります。

新しい環境にすぐ順応しようというのは、羽田空港などにあるような歩く(動く)エスカレーターに飛び乗る感じです。新しい環境には、そのモードがあり、歴史があり、積み重ねがあり、ルールがあります。停まっているエレベーターに乗る感じではありません。なので、飛行機で言えば滑走路を長く走る意識が大事です。新しい環境に落下傘をつけて真上から急降下して着地しようとするのではなく、自分と地面(新しい環境)との距離を少しずつ縮めながら、ゆっくりと長く滑るように着陸する感じでいく意識やゆとりが必要です。

東京の大学に進学した高校時代の友人の何人かが、環境になじめず島根に帰ってきました。ある友人は、「(お店で)これください。」「(遊技場で)両替してください。」「(銭湯で髪を洗うと割り増し料金となるため)髪洗います。」の3つの言葉しか東京で使わなかったと言っていました。彼は、順応しようと焦り躊躇している間に降りるタイミングを失ったのかもしれませんが。

半クラッチというのは、オートバイやマニュアル車を発進させる時、ギアをローに入れて、エンジンの回転をタイヤに伝えていく、初期の微妙なギアのかみ合わせをいいます。ゆっくりとエンジンの回転軸を、タイヤの車軸にかみ合わせていくことで、バイクや車が動き出します。これがうまくいかないとエンスト(エンジンストップ)してしまい、バイクや車は発進できません。坂道発進ではエンストすると後ろに下がってしまうので、補助ブレーキも使いながらの操作になります。

新しい環境や新しい人間関係になじんで行こうとする場合には、この半クラッチの状態を大事にしないといけないと思っています。新しい環境や相手の回転に、自分の回転をゆっくりかみ合わせていくのです。卒業する3年生のみなさん、ゆっくりゆっくりなじんでいきましょう。アフリカで言うポレポレ、車で言う半クラッチ、長い滑走路の意識で、あせらずスタートしていきましょう。





## ○「寄せ鍋」

冬は寄せ鍋のおいしい季節です。石狩鍋、きりたんぼ鍋、芋煮鍋、新潟の家庭料理のっぺい汁など地域によっていろんな鍋があります。“きりたんぼ”は苦手なのですが、秋田県能代市に行った時に食べたきりたんぼ鍋が最高においしかった事を覚えています。食材が地元産で違うのか、冬の厳しい環境の中で食べたからなのか、有名なお店だったからなのかその理由はわかりません。



寄せ鍋は、野菜や魚、肉などお好みの食材を加えて煮込む鍋料理のことを言うので、これが“ザ・鍋料理”というのではありません。必ずこの食材が入っていないといけない決まりもありません。スープ・出汁(だし)にもいろんな種類が見られます。もともとは、寄せ合わせ(余りもの)の食材から作っていたことから、「寄せ鍋」という名前がついたようです。なので、地域ごとに特色も異なりますし、家庭ごとに、あるいは冷蔵庫に残っている食材によっても違ってきます。ちなみに、中国地方では、しめじなどのキノコ類などを入れることが多いようです。

特別支援学校で一緒に勤務した校長先生が、特別支援学校の仕事は、おいしい寄せ鍋を作ることに似ていると言われたことがあります。おいしい寄せ鍋にするには、いろんな食材が入っていることが大事です。個性やタイプ、障がいの異なるたくさんの先生や子どもたちがいる学校だからこそ、自分の持ち味をしっかりと出し合い、それを認め合い、高め合うことが大事だと話しておられました。一人一人が自分の思いをしっかりと持ち、それをまわりに伝えていくことが大事とも話しておられました。

その持ち味がほどよい具合に混ざり合うと、“うまみ”と“こく”が出てきます。特定の食材の味だけが際立つものでなく、それぞれの食材のよさや持ち味がうまく重なり合う必要があります。

蟹(カニ)鍋は、蟹がメインであったとしても他の食材と一緒に煮込み食べるからこそおいしいと思います。これが蟹だけの鍋ならどうでしょうか。

一人一人が自分の思いを出すだけ、自己主張するだけではうまい味にはなりません。学校や職場なども一緒に、みんなで議論を進めながら、お互いの思いを重ねて、みんなでつくりあげていく過程、みんなで合意形成をしていく過程が大切にされないといけません。

「思いを重ねていく」とこと、「言い放つ」とことは違います。また、「非難する」とこと、「批判する」とことは違います。このニュアンスを意識できる感性がとても大事だと思っています。それが多様性を理解することにもつながります。非難は、一方的に責めたたり、とがめたりすること。批判は、広辞苑によると、物事の真偽や善悪を「批」評(価)し「判」定すること。人物や行為などの価値・能力・正当性などを評価することとなっています。つまり、評価が入ります。

学校の合い言葉に、「小さな気遣い」と入れています。1月末の大雪では、野球部をはじめ多くの生徒が自主的・自発的に雪かきをしたことで、地域の方からたくさんの感謝の声が寄せられました。気遣いとは、相手を思いやることでもあります。他者の気持ちに心を寄せ、気持ちをくみ取っていくことが本来の意味です。それは、自分の思いを丁寧に届けることでもあります。その時どれだけ相手の事を想像できているかが大事だと考えます。

とかく私たちは先入観や固定観念をもつため、相手のことを想像することを省略したり、おろそかにしたりすることがあります。多様性社会だからこそ、相手のことを想像していくこと、自分の思いを届けることを丁寧にしていく必要があると思っています。



## 〇「舞い上がれ！」(卒業式式辞抜粋)

3月には弥生という和風月名があります。草木がだんだんと芽吹く月という意味です。12月の師走と3月弥生には、10月神有月のように月がつきません。新たな一年や始まり、そして未来を意識する月だからでしょうか。3月は夢見月とも言います。本来の意味は違いますが、夢をしっかりと見据え、志を大きく、**自立した大人**として、未来に向かってしっかりと芽吹いて欲しい。卒業式のある3月にいつも強く感じる思いです。



ただ今、卒業証書を授与した卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。みなさんは本校所定の全課程を修了しました。過去の高校生が経験したことがないような環境の中での3年間だったこともあり、業を終えた達成感のもとより、大きく成長した自分を感じているのではないのでしょうか。また、休校やマスク着用ではじまった高校生活で、ともすれば仲間との「**心の壁**」を感じることもあったと思いますが、それを乗り越え深まった**絆**の強さを今は感じているのではないのでしょうか。保護者のみなさまも、新型コロナ禍の中で高校生活を過ごすお子様に、時には何もしてあげられない葛藤を感じながらの日々だったと思います。しかし、今日のお子様の凛とした姿を見て、「大事に育ててきてよかったなあ」、「よく成長したなあ」、「よくがんばったなあ」という感慨や安堵感に満たされていることと思います。あらためてましては、お子様のご卒業おめでとうございます。卒業生、保護者のみなさまが、苦難と努力の日々を重ね、そして乗り越えて、今日の日を迎えられたことに敬意を表し、教職員一同心より拍手を送りたいと思います。

在校生は、先輩と過ごした思い出を胸に、先輩の姿に自分の将来の姿を重ね合わせ、憧れを抱きながら祝福していることと思います。教職員も卒業生の成長した姿をみて「学校で働けて本当によかったなあ」と喜びを噛みしめています。

いろんな思いを重ね合わせる今日の佳き日、卒業生の成長によりもたらされた互いの喜びを分かち合うという卒業式の意義の一つを、参列者一同今年より深く感じていると思います。

今日のように、この瞬間のように、人は自分の存在や成長が誰かの喜びとなり、誰かを支えることに結びついたとき、幸せを感じることができます。生きがいを手にすることができます。これからの人生、そういう自分を積み重ねていってください。「私が私であってよかったなあ」「この仕事についてよかったなあ」「がんばってよかったなあ」と思える瞬間を心にたくさん刻めるよう**小さな挑戦・小さな気遣い**を積み重ね、しっかりと芽吹いてください。

「向かい風をつかめ！」。昨年度の贈る言葉です。今年度のNHKの朝ドラは「舞いあがれ！」です。向かい風を受けてこそ大きく飛べると信じ、何事にもあきらめずがんばるヒロインの姿を通して、明るい未来への希望を届けるドラマです。飛行機も凧も逆風を利用します。向かい風により大きく舞い上がります。**大きな志**をもって未来に向かっていく卒業生のみなさんに、同じ言葉をはなむけの言葉とします。

## ミニコラム 「心の壁」

先日、災害時外国人サポートボランティアの研修に参加しました。災害時、日本語のわからない外国の方は、避難所での日本人との習慣の違い(壁)、言葉の違い(壁)からくる情報収集の壁、国籍・在留資格などに起因する援助・補助の壁など、さまざまな壁を感じると知りました。しかし、お互いを理解することで乗り越えることができる壁も多くあります。だから、一番高く乗り越えないといけない壁が心の壁だと知りました。心の壁は言葉がわかれば乗り越えられるものでもありません。まずはお互いを知ろうとするかどうかだと研修を通して思いました。



## ○終業式講話 「学ぶということ」

令和4年度もいろんなところでみなさんががんばってくれました。お褒めや感謝の言葉もたくさんもらいました。新型コロナに振り回されました日々もやっとトンネルの出口が見えてきましたが、引き続き私たちがすべきことはしっかりと行いながら、そしてお互いを気遣いながら、これまで以上に有意義で意味ある日々を送っていきましょう。そのためにも、進級にあたり、気持ちを高めて新年度、新学期を迎えられるよう、目標や計画をしっかりと立てて春休みに入ってください。



さて、卒業式の式辞でも触れた NHK の朝ドラ「舞いあがれ！」。2月上旬放送の第88話は、主人公(舞)の兄(悠人)が、株の不正取引、インサイダー取引で金儲けをしたことでマスコミなどから叩かれ実家に帰る話でした。悠人が心にまとった鎧を脱ぎ、家族とのわだかまりが氷解するラストシーンは感動的でした。そのきっかけが、父の遺した日記を読んだことでした。そこには、悠人の才能を父が認めていること、悠人の夢を父として分かりたいと思っていることがつづられていました。そして、「投資で稼いだお金を何をしたいのか、どういう生き方をしたいのかわからない。夢が何かわからない。だから父である自分は夢を捨てずに、子どもに胸が張れるように夢におかかってあきらめずにがんばらないといけない」ともつづられていました。

「お金儲けをして何が悪いのですか？」・・・村上ファンドを率いて経済界に旋風を巻き起こし、「物言う株主」と呼ばれた村上世彰(よあき)氏が記者会見で発した言葉です。2006年村上氏はニッポン放送株を巡るインサイダー取引の疑いで逮捕されました。記者から、「法律内であれば何をしてもよいとお考えですか？」という問いかけに対して、「金儲け、悪いことですか？みんなも一生懸命働きお金儲けをしているでしょ・・・ルールの中で一生懸命に株取引をして儲ける・・・何が悪いのですか？」と返しました。記者の誰もその場で反論できなかったことを思い出します。私も未だに明確な答えが出せていません。みなさんならどう反論しますか？

「舞いあがれ！」の第88話を観て、探していた答えのヒントを得た気がしました。村上氏の発言があった頃から、例えば地歴公民科の授業も暗記中心から変わりはじめました。『生徒会誌』でも触れましたが、1947(昭和22)年の制定以来一度も改正されることのなかった教育基本法がちょうど2006年に改正され、これにともない学校教育法も改正。学校教育において重視すべき学力の3要素が、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」と定義されました。学力は知識を身につけることだけでつく力ではありません。

五重の塔で人生を表現したとすると、土台は人間力、社会力、学力で構成されると思っています。土台の上で、心柱を支える礎石が志。その志が大きければ大きいほど太くて長い柱が建ち、立派な五重の塔になると思っています。昨今夜間中学の設置や充実が叫ばれています。土台の一つでもある学力を卵で表現すると、黄身にあたる部分が、中学校や高校までに学ぶことで身につく学力。自身の部分はそれ以後の教育や学び、経験の中で身につく学力だと思っています。学び直したいというニーズがあるのは、社会人になり、大人になり自己実現を果たそうとすればするほど黄身の部分の大切さに気づくのだと思っています。

「あの時しっかり勉強しておけばよかった」という言葉は、幅広い年齢層の人から耳にする言葉です。今みなさんは、黄身をつくる大事な時期にいます。今しかできないことをすることも大事な事ですが、今こそすべきこと、学力をつけること、それをしっかりとやってください。人生をより豊かなものにするためにも、そのことを切に訴えお願いして、令和5年度最後の講話とします。